

オットー・フォン・ギールケ『ドイツ団体法論』第一巻(四)

庄子良男訳

Ⅱ. 奉仕法的なゲノツセンシャフト

第二十二章

メロヴィング朝およびカロリング朝の時代において王の奉仕団体から新たな階級が登場し、そして、彼らが奉仕と職務をとおして自らを完全な自由を超えて高め、次第に王国の本来支配的な階級としての真の世襲貴族(Geburtsadel)となったように、後期カロリング朝時代においては、類似のプロセスが、貴族の奉仕従者たち(Dienstgefolgen)において、および、皇帝(Kaiser)の同じ段階に立つ奉仕諸団体において、反復されることが始まった。この発展は、(従来の貴族がより高位のものとしてそれに対立したところの)より低い貴族の形成においてその終結に達した。高位貴族が民族のさまざまな諸要素(を構成する人々)から王の奉仕(Königsdienst)をとおして登場しそして共に成長してきたように、より低い貴族もまた、その形成を主人の奉仕(Herrendienst)をとおして招来されたさまざまな階級の融合に負っていた。その成立のためのしかし極めて本質的な要因は、宮廷奉仕(Hofdi-

ens) および騎士奉仕 (Ritterdienst) をとおして自由を超えて上昇した非自由の奉仕従者 (Dienstgefolge) という最上位の階級であった。そして、それが、十世紀から十三世紀において「ミニステリアーレン (従士たち)」または「デーンストマンネン (奉仕臣下たち)」という特別な非自由階級へと自己を完結し、やがて次第に自由へと到達して、最終的には自由なファッサルレン (Vasallen廷臣たち) および参審員資格のある完全自由民 (Schiffenbaren Volfreien) とともに貴族へと融合したのである。

これらのミニステリアーレン⁽²⁾は、いまや、中世の終わり頃によく下級貴族において解消されるに至るまで、自由と非自由の中間に立つがしかし後者に数えられる固有の〈特別な法に従い生活し、そして、その構成以来、特別のゲノッセンシャフトの中に結合された〉世襲階級 (Geburtsstand) を形成した。⁽³⁾ われわれがデーンストマンネンの階級を奉仕奴隷 (Diensthörigkeit) の階級と称し、彼らの法を奉仕法 (Dienstrecht) と称し、そして、奉仕奴隷を保護奴隷および土地奴隷に、奉仕法を荘園法に〈それらは別の側面からは荘園奴隷および荘園法の特別の種類にすぎないのではあるが〉対立させるときは、我々は、奉仕法の諸ゲノッセンシャフトをもまた、それらが広義においてそれに属するところの荘園法上の諸ゲノッセンシャフトから区別しなければならぬであろう。

I. もともとあらゆる主人の家従者 (Hausdiener) および荘園従者 (Hofdiener) は、しばしば指摘されてきたように、純粹にヘルシャフト的に組織されていた。手工業者や芸術家のようなヨリ階級の低い従僕 (Gesinde) と同様に、それゆえ、主人は、彼のより階級の高い家従者 (Hausdiener) および荘園役人 (Hofbeamten) を置きまたは置き換え、相互に上位に位置づけまたは下位に位置づけることができたし、彼らに特権を与えそして彼らから特権を奪い、彼らの争いを決定し、彼らに対し懲戒権を行使し、彼らの権利を減少させまたは増大し、彼らの組織を決定することができた。個々人は、彼の以前の階級法に従い、たぶん自由に選択された主人との彼の契約に従い、

慣習と道徳に従って、団体外の諸権利を持つことを欲したので、彼は、やがて主人に対してもまた権利を獲得することを欲した。しかしながら、総体または総体の一部分のゲノッセンシャフト的な独立性についてだけは、問題とならなかった。しかしいまや同一の主人の高位の非自由の従者たち (Diener) もまた、次第に多く下位の従者たちに対する関係で、共通の奉仕を排除する制限された奉仕義務⁴⁾という一様の特権をとおして、戦争と宮廷の生活をおとして、官職と土地占有を封土 (Lehn) として受け取る可能性をおとして、登場したとき、そして、これらの諸特権が次第に多く生まれながらのそして奪うことのできないものとみなされるようになったとき、そして、そのようにファミリア (familia) の外形的に認識可能なより高位の構成員たちの間で、保護されなければならない平等なそして共同体的な権利、主張されなければならない共同の利益、履行されなければならない同様の義務が基礎づけられたとき、そこにおいては、至るところで「繰り返」されるドイツ人の思考方法に従って、同一の主人の従者たちの間のゲノッセンシャフトの観念もまた生き生きとしたものとなった。⁵⁾一人の主人に服するすべての人々の総体は、それゆえ、すでに早くから、相互に人的に緊密に結合されたゲノッセンシャフトとみなされた。そして、そのゲノッセンシャフトは、なるほど、その権利とその共同体のもとの基礎が主人において存し、そして、その主人がその独立した首領 (Haupt) であったゆえに、ただヘルシャフト的な結合体 (Vereinigung)、そして、外見上 (in specie) 奉仕奴隷的な結合体を形成したが、しかし、そのゲノッセンシャフトは、主人に対する関係でもまた、固有の総体権の担い手であり、そして、その構成員のためには独立した上位に位置づけられる統一体であった。このゲノッセンシャフトの基礎は、その時代の大部分の結合における以上に人的な性質のものであった。なぜなら、自由な廷臣たちにおいて、奉仕義務は、封建法 (Lehnrecht) の形成以来、すでに物化されていたのに対して、臣下たち (Mannen) においては、奉仕はまだあるいはあるかも知れないベネフィーキウム (特権) から独立して

いたので、彼らは、主人にまづもつて人的に結合されていた⁽⁶⁾。もちろん従者たる地位 (Dienstmannschaft) は、いつでも同時に主人の莊園⁽⁷⁾の従物であり、いつでも同時に主人の城の中にまたは主人のラント (領邦) において定住しており⁽⁸⁾、そして、貸与されたそこでの土地占有の所持人であつた⁽⁹⁾。しかしながらこのすべては、徹底して、彼らの奉仕従者たることの基礎としてではなく、ただ結果としてのみ、みなされた。それゆえミニステリアーレン (従士たち) 相互の結合もまた、何といつても純粹に人的なものであつた。すなわち、それは、(その結合を、ゲノッセンシャフトに、ソキエタス (societas 団体、組合) に、ユニヴェルシタス (universitas 普遍団体)、コムニオ (communio 共有)、あるいはコンソルティウム (consortium 仲間団体) に結びつけ、そして、それを相互の關係において、ゲノッセン (Genossen 仲間たち) または奉仕ゲノッセン (Dienstgenossen) として、コムミニステリアーレン (communitarischen 従士仲間たち)、ソキイ (socii 仲間たち)、コンソキイ (consocii 共同仲間たち)、コンソルテス (consortes 運命共同者たち、同僚たち)、コントリブーレス (contribules 同族者たち)、コンキエヴェス (concives 同市民たち)、コンドモステイーキ (condomostici 同一家族たち)、コンテクターレス (confectales 妻たち)、コンパーレス (compares 同等者たち) として、また、フロインデ (Freunde 友たち)、アミーカー (amici 友たち) などとしても、出現させるところの) 法的、社会的および道德的共同体であつた⁽¹⁰⁾。

このゲノッセンシャフトにおける構成員の地位は、それゆえ、ただ出生⁽¹¹⁾、または、人的な採用を通して取得された。後者は、もちろんとりわけ奉仕奴隸 (Diensthörigkeit) への参加そしてそれゆえ主人を通しての採用を前提とした。なぜならゲノッセンシャフトは、奉仕奴隸的なゲノッセンシャフトであつたからである⁽¹²⁾。しかしながらそれによつては、ひとはただ「ヘルシャフト」団体の中でのみ存在したにすぎず、「ゲノッセ (仲間)」であるためには、ひとは、さらに加えてゲノッセン (仲間たち) をとおしての受け入れを必要とした⁽¹³⁾。そして、逆に、主人は、仲間

を必ずしも一方的に団体 (Verein) から取り出すこと、または、彼に脱退を許すことは、できなかった。譲渡のためには、むしろファミーリアからの脱退のためと同様に、それによって奉仕奴隷はゲノッセンシャフトをもまた放棄するゆえに、ゲノッセンの同意が必要であつた⁽¹⁴⁾。

あらゆるゲノッセンシャフトにおけるように、奉仕臣下たち (Dienstmannen) の団体においてもまた、〈二人のゲノッセの争いをすら総体にとつての恥辱と思わせるところの〉⁽¹⁵⁾ 特別の平和が支配した。この平和の破壊の際においては、それゆえ、贖罪 (Sühne) と賠償 (Buße) は、主人に対する関係でのみならず、ゲノッセンシャフトに対する関係でもまた、負わされた⁽¹⁶⁾。とりわけ、しかしゲノッセンシャフトにおいては、〈なるほど最初は主人の貸与に基づいたがやがてしかし同時にゲノッセンシャフト的なものとみなされ、そして、ゲノッセンシャフト的に継続的形成がなされたところの〉⁽¹⁷⁾ 特別の法が支配した。次第に多く、ヘルシャフト的な保証とならんで、慣習と道徳が妥当し、⁽¹⁸⁾ 次第に多く奉仕臣下自身の命令と選択が奉仕法の源泉とみなされた。主人が彼の臣下たち (Mannen) の関与なしに彼らの権利を減少させることはできないことが、原則となつた⁽¹⁹⁾。それゆえ我々に受け取られている奉仕権 (Dienstrechte) もまた、徹底して主人たちの恩恵としてのみならず、奉仕ゲノッセンシャフトの奪い得ない占有財産として示されるのである⁽²⁰⁾。

荘園法と同様に、奉仕法もまた、あらゆる個々のヘルシャフト団体において異なつていたが、しかし全体として、ラント法のアナロギーに従つて形成されていた。諸法書は、主人の階級に従う奉仕法の差異を示唆している⁽²¹⁾。そして、我々は、それゆえゲノッセンシャフト的な組織化においてもまた、主人の地位に基づいた差異を認めなければならぬであろう。とりわけ、帝国のミニステリアーレン、聖職者たる主人の奉仕臣下、および、世俗的な貴族の従者たちの法におけると同様に、組織においても、より大きな差異が存在したこと、そして、最後に挙げられたク

ラスにおいても、さらにフルスト〔侯爵〕的臣下たちの諸団体と、グラフ〔伯爵〕的な臣下たち、フライヘル〔男爵〕的な臣下たち、または、司教的な臣下たちの諸団体が相互に異なっていたことは、疑われるべきではない。大體において、しかし、すべての団体にゲノッセンシャフト的な基本的特徴は、共通していた。

それゆえ、奉仕奴隸たち (Diensthörigen) に対する主人の裁判権もまたさまざまに規定され、権限、構成および手続もさまざまに規定されていた。しかしながら至る所で我々は、奉仕裁判所 (Dienstgericht) を見出すのである。そしてその奉仕裁判所は、なるほど一方では、ヘルシャフト的な裁判所として現れ、裁判官としての主人または主人の代理人によって維持されるが、他方では、しかし〈ただゲノッセンだけが判決を発見することができ、ただゲノッセンだけがゲノッセンの有利または不利に証人または宣誓補助者として登場することができ、よって〉⁽²⁶⁾ゲノッセンシャフト的に組織化されていた。奉仕臣下たちもまた、相互間の争い、主人との争い、そして、他国人との争いにおいては、仲裁裁判官を選ぶという重要な権利を有している。⁽²⁷⁾

法においておよび裁判所においてと同様に、奉仕団体 (Dienstverband) に関係するすべてのその他の案件において、そして、とくに本来の管理においてもまた、奉仕仲間の総体は、次第に多く主人に対して独立の統一体として対立した。その総体は、それ自身の団体のためにいつでもより自由な自治を獲得したのみならず、それは、政治的な社団 (Körperschaft) として、それがその重要な構成部分を形成したところのヘルシャフト全体の管理に、参加した。初めはただこの団体の主人の恣意に従って、全てのより重要な行為について、一部は証人として、一部は助言者として引き入れられ、⁽²⁸⁾代理人および役人として使用されて、奉仕臣下たちは、やがて統治 (Regiment) に対する持分を求める現実の権利を獲得した。ヘルシャフト的な所有権の処分において、団体からの財産または人々の譲渡において、遺言作成、宣戦布告、講和条約締結、敵対と同盟において、すべてのより重要な政府行為におい

て、主人は、彼らの同意を必要とした。それゆえ、彼らの同意なしには、行為は、有効性をすら欠いていたのである。⁽²⁹⁾ すべてのこれらの権利は、しかし、総体に帰属したので、不在者の同意は、〈ミニステリアーレンのしばしば七人に確定された一定の人数〉が総体の代理人とみなされなかったときは、⁽³⁰⁾ しばしばさらに特別に繰り返された。ここから、やがて後に帝国騎士階級 (Reichsritterschaft) へと移行した帝国奉仕者たち (Reichsdienstleute) の帝国身分上の権利、ならびに、ラント定住の騎士階級のラント身分上の権利が、発展したのである。⁽³¹⁾

彼らのゲマインシャフト的案件的規律のために、奉仕仲間たち (Dienstgenossen) は、〈同時に、社交的な会合としても奉仕したところの〉一部は、定例の会議「集会」を、一部は、臨時の会議「集会」を必要とした。⁽³²⁾ それらは、そもそも主人との間でと同様に相互間で、たんに法定的のみならず、道徳的にもまた、結合されており、互いに相互的な誠実、困難における援助および支持の義務を負い、そして、それゆえすでに外的な区別の標識をとおして一つのゲノッセンシャフトの構成員として自らを示すのがつねであった。⁽³³⁾

最後に、彼らは、共同の財産をもまた占有することができ、そして、彼らの団体に所属する人々の上に対するように、⁽³⁴⁾ ゲノッセンに所属する財産の上に対しても、いずれにせよ一定の総体権〔総有権 (Gesamtrecht)〕を有した。それゆえゲノッセは、彼の財産を、ゲノッセンシャフトの同意なしには、団体から譲渡してはならなかった。⁽³⁵⁾ そして、その点に後の騎士的な撤回権 (Retraktrecht) の萌芽が存在したのである。

そのように広範な独立性とそのように包括的な総体権にもかかわらず、それでも臣下ゲノッセンシャフトは奉仕奴隷的なものとどまった。固有のヘルシャフト権に基づいて、主人は彼らの首領であり、そして、あらゆる個人と同様に、総体は、主人に対して奉仕、誠実および服従の債務を負った。しかしその内的な案件において、彼らが主人に従属的に留まったのみならず、彼らは対外的にもまた、主人によってのみ代理された。⁽³⁶⁾ それゆえ彼らは、

ラント法の外に存在し、ラント法〔領邦法〕上、完全な権利無能力および取引無能力を条件づけた。⁽³⁷⁾ もちろん彼らは、〈固有の物権法、家族法および相続法ならびに固有の刑法および組織法を發展させ、そして、団体の境界内では、完全な取引自由と契約自由、および、人と物の代理を奉仕裁判所の前で許したところの〉⁽³⁸⁾、一つの非常に形成されたそしてラント法に次第しだいに接近する奉仕法 (Dienstrecht 家士法) を享受した。しかしながら厳格なラント法によれば、主人のみが彼らの財産の所有者とみなされ、彼らの人々の代理人とみなされた。時代とともに、しかしながらこの原則は一連のその適用において破壊され、そして、〈そこにおいて奉仕法がラント法の中で消失し、ミニステリアーレンたち (Ministerialität) が独特の非自由な身分関係としての自らを解消し、そして、自由な諸要素をもって新たな階級形成へと融合することができたところの〉道が切り拓かれたのである。⁽³⁹⁾

それによってヘルシャフト的ゲノッセンシャフトとしてのミニステリアーレンの諸社團 (Ministerialenvereine) もまた没落し、そして、十三世紀と十四世紀にこのことが起きたように、崩壊するかまたは自由な騎士階級 (Ritterschaft) へと変化せざるをえなかった。しかし、奉仕奴隸とその特別のゲノッセンシャフトの解消がとりわけ実行されたところの諸点は、一方では、封建制度 (Lehnwesen) とのそれらの結合であり、他方では、騎士制度 (Rittertum) とのそれらの合一であった。次第しだいに承認へと到達したミニステリアーレン (従士たち) の領地を受ける能力 (Lehnfähigkeit) は、彼らの人的な従属性の単なる物的な従属性への変化を導き、そして、それゆえ、封土案件以外のすべての案件において、ラント法の下での地位、すなわち、自由を導いたのである。⁽⁴⁰⁾ 騎士の尊嚴の獲得は、しかし、ほとんどさらにヘルシャフト的な紐帯の粉碎にとってより重要であった。⁽⁴¹⁾ なぜならそれは奉仕臣下を〈ヘルシャフトを超えて、それどころか王国を超えて及ぶ〉〈貴族やフュルストたち、それどころか皇帝すらもそれに属したところの〉階級ゲノッセンシャフトへと、騎士的な集会において同等のゲノッセン (仲間) として、

位置づけ、そして、彼に〈彼の奉仕奴隷たることと少しも関連せず、そして、主人に由来しないところの〉諸権利を与えたからである。⁽⁴²⁾

Ⅱ. そのようにして一人の主人のミニステリアーレンの総体が唯一の奉仕ゲノッセンシャフトを形成したときは、その内部では、個々人の特別の権利、奉仕または利益のゆえに、より狭いフェライン (Vereine 社団) もまた、成立に至ることができた。そのようなものの中で最も重要であるのは、「貨幣製造者 (Münzer) または家ゲノッセン (Hausgenossen) の諸ゲノッセンシャフト」である。⁽⁴³⁾

その他のヘルシャフト諸職務の管理が大部分ファミリアの個々の構成員に譲渡されたのに対して、貨幣製造権 (Münzregal) およびそれと結びついた為替職務 (Wechselamt)⁽⁴⁴⁾ の行使は、既に早期に人々の多数者が委託されるのがつねであった。貨幣製造がまだ王にのみ帰属したカロリング朝時代において、すでに、一つの貨幣製造所における、おそらくフィスカリーネンの階級に属した幾人かの貨幣製造者たちが言及されている。⁽⁴⁵⁾ 後に、貨幣製造がそれに移転したところの聖職者のおよび世俗の主人たちもまた、貨幣製造職 (Münzamt) を彼らの一定数の人々に譲渡した。ミニステリアーレン階級の発展とともに、これらの貨幣製造者たちは、奉仕臣下たちに数えられ、そして、彼らから補充された。⁽⁴⁶⁾ そして、〈初めは単なるヘルシャフト的な荘園職務であったが、やがて手工業者たちと同様の荘園法的な同業組合 (Innungsgilde) となったであろう〉彼らのフェライン (社団) は、いまや、奉仕法のゲノッセンシャフト、すなわち、奉仕法的な同業組合となった。⁽⁴⁷⁾ 奉仕法に属したゆえに、貨幣製造ゲノッセンシャフトは、奉仕主人およびその指名された代理人である貨幣製造官 (Münzmeister) のもとに立ち、彼らによって指揮され、そして、主人から排他的な貨幣刻印と金銭交換 (Geldwechsel) についての彼らの権利を導いた。⁽⁴⁸⁾ 貨幣製造ゲノッセンシャフトは、それゆえ「家」ゲノッセンシャフトと呼ばれる。なぜならそれはファミリア、主人

の家従僕に属したからである。⁽⁴⁹⁾しかし次第しだいにそれはゲノッセンシャフト的な諸権利を獲得した。⁽⁵⁰⁾新たなゲノッセンの採用は、主人をとおしての任命とゲノッセンの側の同意に依存するものとされた。⁽⁵¹⁾貨幣鑄造ゲノッセンシャフトは、貨幣鑄造官そのものを選挙する必要がある、そして、主人は彼をただ認可したに過ぎない。⁽⁵²⁾貨幣鑄造官の裁判所は、判決発見者としてのゲノッセンたちによつて構成された。⁽⁵³⁾年々、ゲノッセンがそこにおいて貨幣鑄造官の議長のもとに彼らの権利を指示し、不正を非難しそして改善し、そして、共通の案件について管理する、⁽⁵⁴⁾三つの定時集會が行われた。特別にゲノッセンシャフト的な権利、および、貨幣鑄造者たちの特別のゲノッセンシャフト的な平和が存在した。⁽⁵⁶⁾職務全体についてと同様に、ゲノッセン総体の貨幣鑄造所についてもまた、奉仕法に従う総体のゲヴェーレ⁽⁵⁸⁾ (Gesamtgewere) が帰属する。⁽⁵⁷⁾総体は、収入に関係し、そしてそれを個々人の間に分配する。⁽⁵⁸⁾要するに、全ての關係において、貨幣鑄造者は、ただ彼らの奉仕奴隷たることをとおしてのみ制限されている。独立の結合体を形成したのである。

ミニステリアーレ(従士)であること一般がそうであるように、しかし、貨幣鑄造者の独特の奉仕ゲノッセンシャフトもまた消失し、そして、既に十三世紀においてそれはその性格を完全に變化させた。奉仕法的なゲノッセンシャフトから、それは、封建法的なゲノッセンシャフトとなり、ヘルシャフト的なゲノッセンシャフトから自由なアイヌング (freie Einung) の原理に基づくゲノッセンシャフトとなつていたのであり、そして、ほとんどただ追憶⁽⁵⁹⁾のみが奉仕法を想起させたのである。奉仕臣下的な出自のゲノッセンは、人的〔身体的〕に自由となり、名望ある市民の諸氏族は、自らを主人に人的に結びつけることなしに、これに加わつた。ケルン (Köln) とレーゲンスブルク (Regensburg) においては、すでに極めて早期において、旧自由民が、貨幣の鑄造を共同占有していた。⁽⁶⁰⁾それゆえ、ゲノッセンシャフトをその主人と関連づける紐帯は、もはや奉仕奴隷および共同の奉仕職務ではなく、た

ださらに封建法に座を占める（人的ではなく封土そのものに基づきそして封土の放棄によって終了する従属性と奉仕義務がそれと関連する）王権（Rega）だけであった。職務そのものはいまや総体封土（Gesamtlehn）とみなされ、主人は封土主人（Lehnsherr）とみなされ、貨幣鑄造者裁判権は封土裁判権とみなされた。そして、構成員たることは、封土への参加であった。⁽⁶¹⁾それ独自の組織において、しかし、貨幣鑄造所ゲノッセンシャフトは、（その他の同業組合とギルドと完全に同列に置かれ、そして、それらに算入された⁽⁶²⁾）自由な諸コルポラチオン（社団）となった。それらは、いまや自ら完全な自由において補充され、そして、完全な自治、自立および制定法上の権利を有し、⁽⁶⁴⁾選ばれたコルポラチオンの諸機関（Korporationsorgane）をとおして代理され、導かれ、⁽⁶⁵⁾付与された職務（officium）と並んで、土地および自由な資本財産⁽⁶⁶⁾についての完全自由の占有を有し、そして、本来の貨幣刻印の問題においてすらいまなおただ主人の上位監督権をとおしてのみ制限されたにすぎないのである。⁽⁶⁷⁾

しかし、結合の本来の基礎が職務封土（Amtslehn）、すなわち、したがって財産権として把握された政治的な不動産物権（Immobiliarrecht）であったことをとおして、貨幣鑄造者ゲノッセンシャフト（Münzergenossenschaften）は、その他の同業組合よりも早期にそしてより高い程度において、ゲノッセン相互間の関係に關してもまた、財産法的基礎の上にもたらされた。構成員地位（Mitgliedschaft）⁽⁶⁸⁾は、いまや有益な私権とみなされ、地位の数は確定され、ゲノッセンレヒトそのものは、相続可能な、⁽⁶⁹⁾譲渡しうる権利として扱われた。ただケルンにおけるゲノッセンシャフトだけは、当該ゲノッセンシャフトから再び譲渡されうる場合には、⁽⁷¹⁾（当該ゲノッセンシャフトにヨリ僅かな価格で売却されなければならなかった）個々の場所についての（たとえ最高額が固定された場合であってもより高い価格での）先買権を有した。そして、個々のゲノッセンレヒト〔仲間であることの権利〕と同様に、総体に属する職務権（Amtsrecht）、その総有的所有権（総有権 Gesamteigentum）、および、その総体資本（Ge-

sammkapitalien) もまた、⁽⁷²⁾ 全ての個々人の財産的利益において利用されるべき有用な諸權利とみなされたのである。

【以上、第二十二章、終わり。】

【第二十二章の注】

注(1) Vgl. bes. Kindlinger, münster. Beitr. II, I. S. 124 f. Horigkeit S. 17 f. Eichhorn, R.G. § 344. Hüllmann, Stände I. S. 28 f. 183 f. 223 f. II. 173 f. III. 213 f. Maurer, Fronh. II. S. 26 f. Zöpl, R.G. § 29. Walter, R.G. § 220-229. Schulte § 83. IV. Wackernagel, das Bischofs- und Dienstmannesrecht von Basel. Basel 1852. Roth v. Schreckenstein, Gesch. der ehemaligen freien Reichsritterschaft I. S. 108 f. 187 f. 248 f. 291 f. Nitzsch, Bürgerthum und Ministerialität. Ennen, Geschichte der Stadt Köln I. S. 427 f. ヲらわけしか。Fürth, die Ministerialen. Köln 1836.

注(2) 彼ら〔ミニステリアーレン、廷臣〕のために登場する最も主要な表示は、dienstman (奉仕臣下) (Henrici V. dipl. d. 1120 ab. Guden. I. 393) 、すなわち、servi (奴隸) 、servientes (奉仕人) 、あるいは、servitores primi (卓越した従僕たち) 、praecipui (優れた人々) 、honorati (名望ある人々) 、nobiles (高貴な人々) 、やがて、honestiores (より気高い人々) 、maiores (より卓越した人々) 、meliores (より良き人々) 、nobiliores de familia (ファミリアのより高貴な人々) 、また、hausgenossen (家仲間) 、ingesinde (一家の召使) 、ministri (従者たち) 、milites (扈從たち) 、militantes (服務者たち) 、fideles (信賴すべき人々) 、clientes (家来たち) 、valletii (守護者たち) 、homines (家来たち) 、そしてまた一般に、Mannen (臣下たち) である。Fürth l.c. S. 57-63. Maurer l.c. II. S. 30 f. をみよ。

注(3) 徹底して適切なフルト (Fürth) の定義 (S. 56, 57) は、いづ。すなわち、ミニステリアーレンは、皇帝およびフルスト〔君主〕の非自由の武器を執りうる家従者という特別の階級であり、彼らは、世襲の純粹に人的な従属關係に立ち、そして特別の奉仕法に従って評価されるのであって、非自由から自由への過渡期を構成している。と。

注(4) ミニステリアーレンの諸奉仕〔役務〕は、主として、名誉あるものとみなされるより高位の家奉仕および宮廷奉仕

に、軍役および官職奉仕に、制限されていた。Fürth S. 187-240. Ennen l.c. S. 427 f. Walter § 224. とりわけしかし彼らの奉仕は、種類と時代に從つて正確に決定されていた。Fürth S. 240-247.

注(5) Fürth S. 47, 48, 166 f. 503, 504. Roth v. Schreckenstein l.c. S. 294 f. 309.

注(6) 奉仕従属性と封土従属性の間の差異をフルトは、正當にも最も本質的なものとして強調している。

注(7) 例えば、グーデン (Guden I. 60) における一三三三年の証書。「場所に向けて所屬するミニステリアールスたちに」(ministerialibus ad locum pertinentibus) と。それゆゑ高祭壇に向けての報告 (traditio ad altare)。例えば、Urk. v. 1140 Monum. boica II. S. 310.

注(8) Fürth S. 146 f. 一人の手にあつたかの領地が集中する場合には、それぞれの領地におけるミニステリアールの仲間一門は、大部分独立のままに留まつた。Leo, Vorles. II. 24.

注(9) Fürth S. 265 f.

注(10) Fürth S. 167, 168. 以下の二つは、それらの二つに類似の呼び名が収集され、そして、証明されている。

注(11) Eichhorn, R.G. § 344 am Anf. Fürth S. 139 f.

注(12) Fürth S. 140 f. Urk. v. 1246 in Monumenta boica I. S. 385 : 「我々のミニステリアールンたちの仲間に向かつて---我々は許した」(ad consortium ministerialium nostrorum --- recepinus)。Urk. v. 1268 b. Kindlinger. minister. Beitz. II. 2. S. 271 : 「我々の従士たちの同一の教会に認めべき法または特權」(ius sive privilegium ecclesiae nostre ministerialium concedentes eidem)。Urk. v. 1156 b. Kindlinger. Horigk. S. 237 : 「かの大修道院のミニステリアールンたちが執務する教会の仲間と法に向かつて、彼は反駁した。」(ecclesiae --- ad consortium et ius, quo ministeriales illius abbatae funguntur, contradidit.)。

注(13) Urk. circa 1150 in Monum. boica VI. S. 101 : 「ある著名な人であるWは、ミニステリアールン法に基づく他の従士たちの承認と意思によつて」聖クイリーニ高祭壇に向けて大修道院長Cの手の財産の中へと自分の女中Oを送つた。

彼の全ての子孫とともに、¹ 関係する職務の人々の同じ高祭壇に向かつて、² 彼が生活し使用する、³ とうとう不滅の条件で、⁴ そのような趣旨で決心して。」(guidam nobilis homo W. delegavit ad altare s. Quirini in manus C. abbatis propriam ancillam O. assensu et voluntate ceterorum ministrorum lege ministeriali: tali stabiliens tenore, ut cum omni posteritate sua vivat et utatur ministrorum ad idem altare pertinentium indissolubini conditione)。Urk. v. 1200 ib. S. 148:「行く行き渡ったミニステリアールスたちの法自身から彼らが享受するため。——ミニステリアールスたちの承諾に向け。」(ut et ipsi lege ministerialium perpetuo fruerentur; —ad probacionem ministerialium)。Vgl. Fürth S. 170, 171.

注(14) Fürth S. 436 f. Urk. v. 1230 b. Honthelm. hist. Trev. I. 706 (ミニステリアールンとの交換); 1251 b. Kindlinger. Horigk. (ミニステリアールンたちの全員一致の会議による交換) ein Tausch de unanimi consilio ministerialium)。Fürth S. 443, 444. Note 1903における、合意なしに行われた譲渡の取消。

注(15) Fürth S. 168:「共同家族の……考える人々は、彼らの二人の遊び仲間の間の……争いを、彼の仲間たちの共同の悪行にみちみち、起つたものを起つたがためである。」(condomestici --- considerantos, non absque communi turpitudine comparium suorum inter duos coequales suos --- pugnam posse committi)。jura minist. Colon. ib. S. 513. § 7. 参考見よ。

注(16) 例え、Fürth. Anh. VI. § 15. S. 531. におけるテクレンブルク封建法 (leges feudales Tskenburgicae)。Ib. S. 523. § 33における、マクデブルクの奉仕臣下法 (Recht der dynstanne to Magdeborch):「奉仕臣下は、司教に、結婚するため、一ポンドを与えるべきであり、そして、奉仕臣下たちには、一人に二ポンドを提供するべきである。」[仮記] (dy dinstman scal geven dem biscope to wedde eyrn pund und dy dinstmanne scholen under ein geven dry punde to bure)。

注(17) Jura minist. Col. Fürth S. 511 pr.:「ツクテルンにおける聖ペテロ大聖堂の従士法 (ミニステリアールン法) は、古

代から整えられており、そして、守られかつ守られるべき制定法である。」(hec sunt jura ministerialia s. Petri in Colonia ab antiquo ordinata et statuta servata et servanda)。

注(18) すべてのまたは若干のところに宣誓せられたゲノッセンから与えられた、奉仕ヴァイステューマーについては、Fürth S. 250-253. を参照せよ。

注(19) Urk. v. 1153 Monum. boica XI. S. 167: 「その他の点では、修道士たち、聖職者たちおよび従士〔ミニステリアールン〕たちが、おのおのその秩序において、破壊なしに永続するであろうこと、そして、〈彼らの意思に反して彼らがあるところのものを廃止するか、または、理性の法からより良い理性においてでないとするれば共同の合意に基づいて変えることは〉我々の承継者たちの何びとにも許されないであろうことを、我々は決定した。」(de cetero statumus, ut monachi, clerici et ministeriales sine disturbance permancant, unusquisque in suo ordine, et nulli successorum nostrorum liceat illis invitis aut tollere que sua sunt aut jura eorum nisi in melius ex consensu communi commutare)° Rotulus off. Hain. b. Fürth S. 533: 「ミニステリアールン自身の共同の同意に基づいて記載された」(consensu communi ipsorum ministerialium --- conscripta)°。

注(20) 〔以下に掲げる〕最古の奉仕法〔家子法(Dienstrechte)がそのことを証明している。すなわち、Justitia ministerialium Babenbergensium〔バーゼルクの従士法(ミニステリアールン法)〕、jura ministerialium Coloniensium〔ケルンの従士法〕、recht der dynstanne to Magdeburg〔マグデブルクの奉仕臣下法〕、recht des stichtes to Hildensen〔ホルテンセンの修道院法〕、leges feudales Teklenburgicae〔テクレンブルクの封建法〕、ならびに、rotulus officiorum Haioniensium〔ハイオニアの公務の赤書〕(すべてフルトにおける付録の中に印刷された)〕、rotulus das Di-enstmannenrecht von Basel (ヴァッカーナーゲル編集)〔バーゼルの奉仕臣下法〕。Fürth S. 254 f. をみよ。Kindlinger, münster. Beitr. II, 2. S. 48 f. における一〇八六年のフレッケンドルフ修道院の従士法(Recht der Ministerialen des Stiftes Freckendorf v.J. 1086) の改善。

注(21) ザクセンシュビーゲル (Sachsensp.) III. 42. § 2: 「何びとも終つさせんことができないといふやうにしばしば行われれているところの奉仕従者たちの権利について、本書が極めて僅かにしか言っていないことは、いまやあなた方を驚かさないのであらう。若干の司教および大修道院長および教区付聖職者のものでは、奉仕従者たちは特別の権利を有する。」 (nu ne latet jük nicht wunderen, dat dit buk so lüttel seget von dinstlücke rechte, went it is so mannich valt, dat is nieman zu ende komen kann: under jewekem bischope unde abbete unde ebedeischen hebben die dinstlücke sunderlik recht.) ° Cf. Schwabensp. [シヤッペーゲンシュビーゲル] c. 48. § 4-8; c. 54. II. § 5-8. Sächs. Lehn. [ザクヤン封建法] c. 67. Schwäb. Lehn. [シヤッペーゲン封建法] c. 115. III. § 4. Vetus auctor de beneficiis [諸特権に關する] I. § 131.

注(22) Schwabensp. c. 48: 「奉仕臣下を有する君主の司祭は一つの権利を有する。大修道院長の支配される奉仕臣下は別の権利を有する。封建諸侯の奉仕臣下は特別の権利を有する。」 (die priester fürsten die haben dienstman die haben ein recht. Der äpfissin dienstman die geüfret seind dye haben ein ander recht. Der leyenfürsten dienstman haben sunder recht.) ° c. 54. 「帝国の奉仕臣下は特別の権利を有す。」 (Des reichs dienstman haben sunderlich recht) °.

注(23) フュルト (Fürth) シュタラー (Maurer) もまた、奉仕臣下 (Dienstmannen) の三個のクラスを認めている。すなわち、

1. 帝国の従士 (ライヒスシヒスティアーマン) (Fürth S. 119-133. Maurer l.c. II. 38-46) °。その特徴は、帝国による彼らの譲渡不可能性、帝国財産を占有するといふ彼らの能力、皇帝の助言と裁判所への彼らの参加、高められた身分上の名誉において存在する °。 Cf. auch Zöpfl § 30a. III. Sachsensp. III. 19. 81. § 1. Schwabensp. c. 158; 特別にしかし小さな皇帝権 (das kleine Kaiserrecht) III. c. 1-8. 17-19. 33 ec.

2. 教会のシヒスティアーマン (Fürth S. 133-137. Maurer l.c. 40. 41) °。それらの者の間じ、ゆゑに、聖職者のフュ

ルストたちのミニステリアーレンは、フルストたちのその他の聖職者のヘルシャフトに対して諸特権を有した。

3. 貴族のミニステリアーレン (Fürth S. 137-139, Maurer l.c. 41) すなわち、フルステン (Fürsten皇帝直属の領主)、グラーフエン (Grafen伯爵、代官) およびディナステン (Dynasten小国の君主) のミニステリアーレン、ならびに、帝国奉仕人および教会奉仕人の背後に順位のうえで退いている教会設立者 (den geistlichen Stifter) のミニステリアーレン。

注(24) Fürth S. 394 f.

注(25) Cölnisch dienst. b. Fürth S. 521. § 11: 「しかし誰かが同じ主人によつて尋問されるときは、彼を何びともその判決のゆえに同一の王国のハウスゲノッセ (家仲間) の中に雇い入れるべきではないであろう。〔仮訳〕」 (ever wirt je man vorgeeicht van sime herren, so en sal nieman ume dat urdel bevracht werden ain ein husgenosse desselben reichz.)。Recht des stiftes to Hildensen [ホルテンヤンの修道院法] ib. S. 526. § 9: 「司教が同じ奉仕臣下に責任を負わせるべきは、彼は司教に対して彼の奉仕臣下たちに先立つて応えるべきである。」 (gift de biscep scult sime den estmanne, he scal eme antworden vor sinen denestmanne.)。Leg. feud. Tekl. [テクレンブルク封建法] ib. S. 529. § 5. Recht der dynstmanne to Magdeborch [マクデブルク奉仕臣下法] § 1: 「これがマクデブルクの奉仕臣下たちが獲得したところの第一のものである。彼らがヘールシルト〔封建法上の権利能力〕として生まれたのでないならば、彼は、彼らを得るかまたは見出すとはべきなところへ。」〔仮訳〕 (dyt ys dat erste, dat dy dinstlude von Magdeborch gewunnen hebben: dat nemen ordele uppe sy vinden en mach he sy to dem herscilde geboren.)。

注(26) Cöln. Dienst. § 11. Recht des stiftes to Hildensen § 2. Urk. v. 1120 Monum. boica VI. 67. 証言に關し、Fürth S. 416. Note 1818.

注(27) Grimm, R.A. S. 749. 750. Fürth S. 406. 407.

注(28) 婚姻の締結において、家その他の重要な諸案件において、諸契約において、判決において、決議などにおいて、

そうである。Fürth S. 157 f. 171 f.

注(29) 奉仕臣下たちの反抗についての有益な行為すら失敗した場所で、奉仕臣下たちの合意の欠缺のゆえに有効でないものとして契約が否定された場所である(1177 Monum. boica III. 459)。¹ 非関与のゆえに服従の形式的な拒否が生じた場所で、諸例を提出している、フルトFürth S. 160-166.を見よ。

注(30) Fürth S. 163.

注(31) Hüllmann, Stände I. S. 223 f. 231 f. III. 221 f.

注(32) Fürth S. 169. 170.

注(33) Fürth S. 170.

注(34) このことは、例えば、ゲノッセでない者との婚姻のためには、主人の承認のみならず、ゲノッセたちの承認もまた要求されたことの中に、示されている。マイヒェルベック (Michelbeck, historia Frising. I. 2. S. 560) における一八二年の証書は言う。すなわち、「あなた方の教会のミニステリアリスであるRは、われわれの共同の合意と、我々の教会のミニステリアーレスたちの共同の合意によって、我々の家の妻を導いた。」(R. ministerialis ecclesiae vestrae communi consensu nostro et ministerialium ecclesiae nostrae uxorem de domo nostra duxit.)²

注(35) Fürth S. 168. 169. Zöpl § 30a. II. Schwabensp. c. 158. フォルトFürthは、証書および法書の中で (z.B. Sachsensp. III. 78. § 5. Schwabensp. c. 105. III. § 4) 言及される友人たち (amici oder vründe) の承認 (Genehmigung) を求めたこれに関係づけらる。

注(36) Kindlinger, Hörigk. S. 18. Fürth S. 150 f.

注(37) Fürth S. 105 f. 247 f. 260 f. 479 f. Maurer lc. II. S. 41 f.

注(38) ラント法とハーフェン法との比較のものである奉仕法 (Dienstrecht家人法) の諸法規の詳細な叙述をFürth S. 260-423. が与えている。Walter lc. § 226. を参照せよ。

注(39) Hüllmann, Stände II. 256 f. Fürth S. 472 f. Walter § 229. Maurer lc. II. 50. 51. ハートレーハンブルグ年次 c. 158「すべし」奉仕臣トは、^ハすべしのランツ法に従ひて自由民ヤリて取得に相続する。」(dienstman nement erbe und erben als vrie lute nah allem lantrecht) 又「^ハすべし」^ハ。 Gosen, das Privatrecht nach dem kleinen Kaiserrecht (Heidelberg 1866) § 9.

注(40) Fürth S. 423-436. Maurer II. 49. Walter § 228.

注(41) Fürth S. 65-88, besonders aber Maurer lc. S. 29 f. Auch Walter § 228.

注(42) 次の章を参照せよ。

注(43) Hüllmann, Ständewesen II. S. 17 f.; Stände III. S. 26 f. Eichhorn, Zeitschr. f. gesch. R.W. II. S. 218; R.G. § 296. Wilda, Gildenwesen S. 195 f. Arnold, Freistädte I. S. 270 f. Heusler, Verfassungsgesch. v. Basel S. 58 f. Ennen, Geschichte der Stadt Köln I. S. 430 f. Lambert, Städte II. S. 192 f.

注(44) ハの結ひひきひひひひ Hüllmann, Städte lc. S. 28 f. Urk. f. Constanx v. 1240 b. Neugart II. S. 172. を見よ。

注(45) Capit. de moneta 809, c. 2. b. Pertz I. 159.

注(46) 最古のシユトラスブルク都市法 c. 63: 「何ひひひ、^ハ彼がこの教会のファミリアの者でないならば、デナリウス銀貨を鑄造してはならぬ。」(nullus facere denarios debet, nisi qui sit de familia huius ecclesiae.)。

注(47) それゆえオフィキウム (officium) の名称はゲノッセンシャフトのためにも「用ゐられる」。 Ennen u. Eckertz, Quellen II. 464: 「我々の貨幣の職務」(officia monetarum nostrae)。例外的にバーゼルにおいては、司教によつて占有され、そしてやがて相続され、そして、その代表者を司教から受け取ったところの、同時に金細工師を包含するハウスゲノッセンの同業組合は、奉仕法的な同業組合ではなく、荘園法的な同業組合であった。ただその代表者だけがミニステリアール (従士) であった。 Heusler S. 83. 84.

注(48) このことは、とくに最古のシユトラスブルク都市法Strasb. Stadtr. c. 59-79. において登場する。ケルンKölnにおい

ても、造幣局長官 (magister monetæ) は、大司教 (Erzbischof) によつて任命された。Ennen u. Eckertz l.c. II. 18. III. 104.

注(49) 前注(46)におけるシュトラスブルク都市法c. 63. とその翻訳:「もしそれゆゑ彼がこの神の家〔教会〕の従者でないならば」(er ensi dan dez gesindes deses Gotteshuses)。貨幣鑄造者としての「家ゲノッセン」〔家仲間〕は、とくにケルン、レーゲンスブルク、シュトラスブルク、ウォルムス、バーゼル、アウクスブルク、マインツ、ヴィーン、フランクフルトにおいて登場している。(シュパイヤーにおいてはその名称はもつと包括的な意味を受け取った)。ヒルマン (Hilman l.c. S. 23) は「集積所 (Versammlungshaus) または造幣所 (Münzhaus) の名称を全く誤つて説明している。

注(50) 彼らの結合は「それゆゑコミュニティス (communitas 共同体) (Lacomblet, Niederhein. Urkundenb. II. 206. Urk. v. 1252:「家ゲノッセンと呼ばれる両替商たちの共同体」 communitas campsorum qui husgenosze dicuntur.)、ユニヴェルシタス (universitas 普遍団体) (Urk. v. 1207 Ennen u. Eckertz II. 30:「ハウスゲノス (家仲間) と呼ばれる人々のユニヴェルシタスの一部からケルンの貨幣鑄造者である我々に向かつて加わる人々。」 accedentes ad nos quidam monetarii Colonienses ex parte universitatis eorum qui husgenoi dicuntur.)、フンメルティウム〔共同団体〕 (Urk. v. 1238 u. 1245 ib. S. 126. 179. 180. 241. Urk. v. 1263 b. Schannat, hist. Worm. II. S. 163.)、フンメルティウム・エンキータス〔組合〕 (ein consortium et societas) (Urk. v. 1207 ut.)、ゲノス〔仲間〕である」(eine genoszschaft ec.) など、と呼ばれた。

注(51) すでに一二〇七年において、ケルンのハウスゲノッセンたちは、彼らの意思に反しては何びとも「彼ら自身の共同団体と組合」(consorcio ipsorum et societat)に、入れられてはならないという、古い特権を保有していた。(Cf. Ennen u. Eckertz II. S. 30. を参照せよ。Urk. v. 1225 ib. 98. 99. を見よ。同様に、共同で貨幣鑄造者主人であり奉仕主人であった司教 (Bischof) とヘルツォーク (大公Herzog) は「アウクスブルクにおいて、「貨幣鑄造者たち自身を、貨

幣鑄造者たちおよびこの人々のコンソルキウム〔共同団体〕の受け取られるべき何らかの職務に向けて、我々は決して意思に反して強要しなかつた」(quod ipsos monetarios ad recipiendum aliquem ad officium monetariorum et eorum consortium invitos nullatenus compellimus) を約束した。Urk. v. 1272 b. Hüllmann, Städte II, S. 28, Note 70; v. 1295 b. Ried I, S. 688, Gemeiner, Chronik I, S. 442. またすでに、最古のシュートラスブルク都市法によれば、入会許可料 (Aufnahmegebühren) の一部がゲノッセンシャフトに帰属した。

注(52) シュバイエル (Speier) においては、年々更新された選挙が行われた。Lehmann, Speierer Chronik IV, S. 293, 294, Arnold I, S. 274.

注(53) Arnold I, c. S. 274-276, Urk. v. 1339 b. Böhmner S. 560, Ochs, Gesch. v. Basel II, I, S. 128, 129, アウクスターヌム法 (Jus Augustanum b. Hüllmann I, c. S. 27, Note 61) : 「一人の貨幣鑄造長官は裁判を行う十二人のハウスゲノッセンを持つべきである」(ain munzmeister soll XII husgenossen haben, die richtent)。造幣局長官自身は、一三三〇年のシュバイエルの特権に従って、最古のゲノッセンを前にしても正当な地位を有した。

注(54) Arnold I, c. I, S. 276.

注(55) Urk. v. 1272 b. Gemeiner I, c. 401 : 「一般にハウスゲノッセンシャフトと言われる権利を有する有効なボン町の貨幣鑄造者たちを」(monetarios Ratisbonenses, qui jus habent, quod vulgariter hausgenossenschaft dicitur)。

注(56) 特別な平和が、貨幣鑄造所においてもまた、為替銀行の屋根のもとに、それぞれがヴァイセンブルク (Weissenburg) においては貨幣鑄造者の私的な住居においてすら、支配した。Hüllmann S. 30, 31, Heusler S. 87, を参照せよ。

注(57) すでに一二八九年において、しかし、シュバイエルのハウスゲノッセンと貨幣鑄造者たちは、共同の市役所と貨幣鑄造所に関しての自由な契約を締結し、それゆえすでにラント法による総手的所有権 (総有権) を有した。Urk. b. Remling I, 384.

注(58) 以下、注(66) および(72)を見よ。

注(59) それに属するのは、主人またはその役人に給付されるべき個々の奉仕、例えばマインツにおいては、一人のザールマン (Salmen受託者) または従者 (Kämmerer) への五十五フランケン of 年々の引渡し、これらの者を墓に運ぶ義務などである。Urk. b. Guden II 462. 463.

注(60) Arnold I.c. S. 272. 異説、Nitzsch S. 282. Lambert I.c. II. S. 192 f.

注(61) とくに、それゆえ一二五八年と一二五九年に「造幣所の理由による封土」(feuda ratione monetæ) など、ハウスゲノッセンシャフトと一般に呼ばれているものの封土」(feudum quod Hausgenossenschaft vulgariter appellatur) と言いつつ、そして、大司教が職務の濫用のゆえに行つたゲノッセンシャフトの廃止が失効した封土 (Lehn) の押収であるように見える、ケルン (Köln) におつてなどである。Urk. b. Lacombl. I.c. II. 257. 263. チューリッヒにおつてもまた、造幣局 (Münze) は、独立した市民の一定数に対して与えられる封土であるように思われる。Urk. v. 1364 b. Neugart II. 464. ウォルムス、シュパイエル、バーゼルにおいても類似 [である]。Hüllmann I.c. S. 25. 26.

注(62) 例えば、ゴスラール (Goslar b. Göschel S. 114) の一二一九年以降の特権において、そうである。そこでは、すべてのその他のギルドは、「いかなる盟約も約束も、あるいは、ドイツで同業組合またはギルドと言われている組合も、貨幣製造者たちの基礎でないとするならば、存在しないであらうゆえに」(quod nulla sit conjuratio nec promissio vel societas quæ theutonice dicitur eyninge vel ghilde nisi solum monetariorum.) など、文言をめぐって禁止されている。Hüllmann I.c. S. 28. における、宣誓による結合。

注(63) Urk. v. 1295 b. Gemeiner I. 442 : 「たゞそれらに彼らがハウスゲノス [家仲間] を置くべきこと」(swenne si einen hausgenoz setzent) 。Urk. v. 1230. 1238. 1245 b. Ennen u. Eckertz II. S. 126. 175. 179. 180. 241 : 「彼らが他人の自由な能力を持たんがために、選ばれるべきとして任命されるべき他の人または他の人々を彼らのコンメンルティウムの中へと [入れる] 」。 (ut liberam habeant facultatem alium vel alios in consortium suum eligendi et instituendi) 。選挙方式については、ib. I. S. 307. 自由な団体結成をとおしてのケルンにおけるゲノッセンシャフトの拡大については、

ib. I. S. 103 f. 315.

注(64) ひとつは、ただEnnen u. Eckertz I. S. 103 f. における、ケルンの貨幣鑄造者のハウスゲノッセンの諸規約のみを参照せよ。

注(65) それゆえケルンにおいては、十三世紀の終わり頃、大司教によって任命された上級監督を指導する造幣局長官に、本来のコルボラチオンの機関としてのゲゼルシャフトによって自由に選ばれた固有のマイスターが、対立する。Ennen I. S. 431. Ennen u. Eckertz I. 307 f. II. 386. 彼らは集会を招集し、あらゆる人々が罰金のゆえに守るべき多数決により「契約」¹⁾ 罰金を要求し、平和罰金 (Friedensbann) をもつ²⁾ など。ib. I. S. 316 : 「貨幣の協議会」 (consilium monetarum)。

注(66) Ennen u. Eckertz I. 303 f. 315³⁾ および、以下、第二部〔本書第二巻〕⁴⁾ を見よ。

注(67) Ennen I.c. I. 431. 貨幣鑄造者たちの恣意に対してウォルムスの司教を保護するために、皇帝の特権をすら必要とした。Urk. v. 1283 Schannat II. 144 : 「一般にハウスゲノスと呼ばれるコンソルティウムの意思に従ってよりも⁵⁾、むしろ法と慣習に従って貨幣を鑄造する⁶⁾」 (monetam potius cudere secundum jus et consuetudinem quam juxta voluntatem consortium qui vulgariter Huesgenocz appellantur)。

注(68) それゆえ「構成員地位の数」マインツ、アウクスブルク、エーリンゲンおよびエルフルトにおいては十二に (Hüllmann, Städte II. S. 27) 、ケルンにおいては四十に (Ennen I. 431) 、ヴィーンにおいては四十八に (Hüllmann, Städte III. S. 27) 〔確定されていた〕。

注(69) それゆえヴィーンにおいては、息子たちが、そして、息子たちの後に娘たちが長子相続権 (Erbsgeburtsrecht) を、場合によっては、寡婦が、最後にその他の親類もまた、ゲノッセンシャフトを相続した。Hüllmann, Stände III. S. 27. パーゼルにおける相続権 : Ochs II. 2. S. 128. ケルンにおいては、俗人身分の男子の嫡出の子孫が相続した。Ennen u. Eckertz I. 313. 314. 彼らは自らを「我々はケルンにおける貨幣についての相続ハウスゲノッセンの主人たち」〔である〕

(herren dye Eirhuigenossen up der Mynzen in Colne.) と名づけた。ib. 303.

注(70) Ennen und Eckertz I. 306. 314. 315. における売却。贈与。ib. S. 314.

注(71) Statut u. 1314 b. Ennen und Eckertz I. 306. 最大限度の設定において、ハウスゲノッセンシャフトと言われている職務 (officium quod dicitur huisgenozschaft) の公的性格のまだ遠ざけられているにせよ承認が存在している。

注(72) Ennen und Eckertz I. 303-316.

注(73) この点についてのより詳細なことがらは、ゲノッセンシャフトに帰属する総体正義 (Gesamtgerechtigkeit) の法的性質について取り扱われなければならない第二部において「述べられる」。

【以上、第二十二章の注、終わり。】
【以下、「Ⅲ. 封建法のゲノッセンシャフト 第二十三章」に続く。】

Ⅲ. 封建法のゲノッセンシャフト

第二十三章

自由なファッサルレン「廷臣たち」(freie Vassallen) は、以前から、ただファッサルレンの案件においてのみ、民族法 (Volksrecht) と民族裁判所 (Volksgericht) から排除されていたに過ぎない。⁽¹⁾ しかし廷臣団体 (Vassallen-verband) が及んだ限りで、廷臣たちは、もともと非自由民たる臣下たち (unfreie Männer) と同じ状態にあった。廷臣団体において権利、位階および利得を与えたのは、主人の恩恵であり、主人は支配、命令、懲罰を有し、主人の裁量に、全体の組織、個々人の上級または下級の秩序、奉仕奴隷的な臣下たちの自由民および貴族たちとの同列化が、依存していた。廷臣へと自らを委ねた貴族と自由民は、条件を作り、これらの条件のために民族法の保護を

留保することができた。出自によりまたは契約をとおして存続する廷臣たることの間にもまた、主人に対する関係で個々人のさまざまな権利が展開することができた。いつでも先ず以って主人は、〈主人の廷臣たちの総体を彼らの人的な法領域の一部に関して民族法から切り離し、すなわち、彼らの自由を減少させたところの〉人的な保護主人 (Schutzherr) に留まった。

十世紀以来、廷臣たること (Vassallität) と特権制度 (Beneficialwesen) の完全な融合から成長した本来の封建法 (Lehnrecht) の発展とともに、このことは変化した。従属的占有の物的関係がいまや唯一の実体となり、人的従属性の唯一の源泉となった。あらゆる誠実奉仕義務 (Treuendienstpflicht) は、いまや封土の放棄とともに終了した。封土裁判権は、財産にのみ、そして、主人と廷臣の人的関係が直接物的関係から流出した限りでのみこの人的関係に、及んだ。封土の喪失は、封土莊園 (Lehnhof) がそれを認識することができた最高の刑罰となった。裁判所の管轄権は、純粹に物的に決定された。それによって廷臣の「人格 (Person)」は「それ自身として」封建法には、もはや服さず、ただ封土 (Lehenレーエン) それ自体のみが民族法と民族裁判所から取り出され、廷臣の人格のためには、部分的であるにせよあらゆる民族法からの除外を、そしてそれによってただ部分的であるにせよあらゆる自由の減少を、停止したのである。⁽²⁾

廷臣制の人的基礎が疑いなく確定的に存在した時代と形成された封建法の時代との間に当然のことに、人的な従属性が、あるときはまだ独立の関係として現れ、あるときはただ従属的占有の流出として現れる、長いそして動揺する移行期が存在した。

疑いなく、廷臣制がまだ一人の主人のもとへの服従と認められたあの時代から、同一の主人の自由な廷臣たち (freie Vassallen) の間のゲノッセン団体という理念が由来している。もちろん、莊園法および奉仕法のゲノッセ

ンシャフトのように力強くは、廷臣のゲノッセンシャフトは發展することができなかった。なぜなら、自由な廷臣たちは、依然として民族的なゲノッセンシャフトに属していたゆえに、彼らの間の特別のゲノッセン結合の必要性は、民族法によって切斷された諸階級におけるよりも、ほとんど活発ではなかった。それにもかかわらず、時代の経過の中で、全ての公的諸団体とそれらによって保証された権利保護の力と意味が沈下し、他方では、廷臣の諸案件の範囲と価値が上昇した。出自と諸契約をとおしてあらゆる廷臣団体のために同一の団体において支配する一つの共通の法が形成され、この法の確定と保護と継続的形成における廷臣たちの同じ利益が前面に現れ、新たな法の共通の原則をとおしての諸利益についての確固とした相続可能な権利の基礎づけが、とくにすべての廷臣たちに通の目標として現れた。それによって、ここでもまた、一つのゲノッセンシャフトが与えられた。同一の主人の廷臣たちは、もはやたんに彼らの主人の助言のためのみではなく、自己の総体権の行使のためおよび共同の諸利益の確保のために、会合し、⁽³⁾彼らは彼らのゲノッセンクライス〔仲間範囲〕において妥当する法を示し、彼らは主人を〔主人が廷臣の諸案件における決定または懲罰を行使したところで〕ゲノッセンシャフト的な判決発見者〔*Urteilsfinder*〕⁽⁴⁾として助け、そして、彼らは主人を主人のすべての処分において制限した。

廷臣制が封建制度において現れたとき、廷臣ゲノッセンシャフトは、ヘルシャフト的ゲノッセンシャフトとしての彼らの古い形態においては、中絶せざるをえなかった。しかし同一の主人の廷臣たちの関連は、それによって決して終了せず、関係全体として物的な基礎の上にのみもたらされたにすぎない。諸特権についての世襲的なゲヴェーレの成立以来、当然にその設定とそこから生ずる争いについて同様に権限を有するものとなった保護ゲノッセンシャフト的な廷臣裁判所〔*Vasallengerichte*〕⁽⁵⁾は、いまやこの権限へと制限され、そして、そのようにして真の封土裁判所に移行したが、しかし裁判所仲間〔*pares curiae*〕によるゲノッセンシャフト的な構成は、存在し続

けた。同一の主人の廷臣たちであったのは、いまや、封土をその主人から受け取った全ての人々であった。しかしこの封土占有の結果であったのは、いまやたんに主人に対する人的な奉仕関係のみならず、同時に同一の主人のその他の点では平等に置かれている封土把持者に対する人的なゲノッセン関係であった。主人の封土を有したすべての人々は、それゆえいまや主人の宮廷にすでにその占有のゆえに会合し、そして、彼に対する関係で一つの〈ゲノッセンシャフト的〉に結合され、自ら権利を与えられた、主人をさまざまに制限する総体を意味した。

これらの諸団体の継続的形成にとつては、もともと奉仕法的な諸関係もまた、廷臣たちの諸関係と同様に、物的な実体を受け取ったことが、さらに特別の重要性を有する。奉仕封土はじめは奉仕奴隷制 (Diensthörigkeit) の結果であったとしても、それは、結局、いまだただ奉仕奴隷制をとおしてのみ条件づけられ限界づけられていた奉仕義務の基礎となった。これによってミニステリアルレン制の解消およびその変遷がそこにおいて単なる封土結合へと登場したのと同じ程度において、封建法的なゲノッセンシャフトの〈そのようにして完全な自由へと上昇した〉諸要素が〈この封建法的ゲノッセンシャフトが最後に特別な奉仕臣下団体 (Dienstmannenverbände) を全く吸収するまでに〉成長して増大せざるをえなかった。確定したケルパーシャフト的な組織を、もちろん、そのようにして成立した諸総体はもたなかった。そのような組織を、諸総体は、むしろ引き続く時期において、アイヌング制度 (Einungswesen [約定による結社制度、同業組合制度]) の影響のもとに初めて受け取った。しかし、主人のもとに存在する独立したそれらの統一体は極めて具体的に露わに現れるだけに、それだけ一層疑いなくゲノッセンシャフトとみなされるのである。

個別においては、暗示された種類の発展は、はじめは帝国じたいにおいて遂行され、そして、そこ〔帝国〕で王のもとに長老として立つ上級貴族のゲノッセンシャフトを生み出した。すでにフランク王国において、国王の奉仕

の自己完結した貴族制が多くの点において一つの政治的統一体を形成していた。⁽⁶⁾ このことは、その統一体が、本質的に世襲的階級であつたところの一つの階級として自己を完結したときに、より鋭く現れざるを得なかつた。それは、いまや、その総体において帝国の共同の担い手であつた自己自身の中に自ら結合する団体となつた。この団体は、しかし、帝国の政府が封建的に形成されればされるほど、それだけいっそう封土ゲノッセンシャフトの本質と形式を受け取つた。——上級貴族の核心は、もちろんもとは封建的階級ではなかつた。これは、むしろ（インムニテート〔治外法権〕を伴う完全私有地のグルントヘルシャフト〔土地支配制、莊園制度〕の所有者を包含し、それゆえにただ古代ゲルマンの完全自由制と完全に自由な土地所有制を完全な範圍において継続した⁽⁷⁾）自由な主人たちの階級であつた。しかしながら完全私有地のグルントヘルモまた、王から裁判権（Gerichtsbann）を付与されなければならなかつた。そして、たとえ彼がそれに対する権利をもまた有し⁽⁸⁾、そして、その場合に廷臣となる必要がなかつたとしても、それでもなおかつ「本質的に本来の封土の類推であつたところの」この付与は、下に向かつての自由な主人の権力の基礎として、ならびに、帝国集会への主人の参加の基礎、そしてそれによって帝国の積極的な担い手への主人の参加の基礎として、みなされた。これとは反対に、完全に封建的に形成されたのは、本来的な帝国諸職務、グラーフシャフテン、再構築されたヘルツォークの諸職務、そして、後者の崩壊後はフルストの諸職務であつた。⁽¹⁰⁾ それゆえ（やがて最上位の帝国宮内職が〔彼らもまたもはや奉仕法に従つてではなく封建法に従つて許されたことによつて〕それらと同列に置かれたところの）これらの上級の帝国封土の保有者たちは、〈この階級——鏡のようなフルスト階級——は、まさに本来的に封土ゲノッセンシャフトであつたゆえに〉「特別の階級へと自らを完結させたのである。なぜならその階級は、皇帝によつて直接、封建的形態における公的権力の最高の種類を（軍旗封土Famlienまたは槍封土Septerleinとして）付与されて受け取つていたところの、帝国廷臣たち

(Reichsvassallen) を結合したからである。

そのように帝国の主人階級である上級貴族がさまざまな諸要素から生じており、そして、完全自由民のインムニテート〔治外法権〕ヘルシャフトにおいてと同様に、帝国ファッサルレン制においても、最上位の帝国ミニステリアーレン制においても、根を下ろしていたとすれば、本来の封建貴族 (Lehnadel) としてのその性格は、それでもつねにより鋭くそして決定的に刻印された。⁽¹³⁾ フランク王国の時代において貴族制の構成員地位 (Mitgliedschaft) を与えた人的な王の奉仕 (Königsdienst) の代わりに、いまや〈それと命令権 (Bann罰令権) が封建制に類似する公権委託 (Beleihung) の方法で結合された〉皇帝に由来するヘルシャフト封土 (Herrschaftslehen) または領土 (Territorium) に対する権利が、帝国への積極的関与の基礎となった。ただ本来のヘルシャフトをもって公権委託され、そしてその代わりに帝国に奉仕と誠実の義務を負ったところの〈そして彼らの側から下に向かつては封土主人 (Lehnherren 封建君主) として権力をさらに与えたところの〉臣下たち (Männer) だけが、いまやまだ帝国の完全ゲノッセンであり、〈そして〉、〈全てのその他の自由民が単なる帝国保護ゲノッセンとなったことによつて〉唯一いまだ最狭義のそして本来の意味における「帝国 (das Reich)」であった。上に向かつては、彼ら〔臣下たち〕は、もちろんまだ後のように、皇帝がそれにとつて団体組織のハウプトである自由ゲノッセンシャフトではなく、皇帝はその「主人 Herr」(長老 Senior) である。しかし彼の主人権から次第しだいに封建臣下制 (Lehnsmanschaft) へと移行した。主人は、ただだんに彼ら〔臣下たち〕からそして彼らによつて選ばれるのみならず、彼〔主人〕は彼ら〔臣下たち〕を前にして正当な権利を有し、彼らとともに帝国議会において帝国統治を分け持った。帝国議会は、もはや臣民 (Getreuen) の単なる審議集会ではなく、〈帝国封土把持者たちの総体がそこにおいて封土主人 (Lehnsherr 封建君主) に助言しそして制限を与え、帝国ゲノッセンシャフトの権利を指示し、または、創造

し、封土主人との協定および契約を帝国諸法律の形式において締結するところの⁽¹⁶⁾封建議會 (Lehnskurie)⁽¹⁵⁾である。階級のゲノッセンシャフト的な組織は、しかしまた、封土の関連を超えてゲノッセンシャフト的な裁判権においてもまた示される。構成員の身体と名誉が問題となる⁽¹⁷⁾ところでは、ただ王のみが裁判官であることができ、ただゲノッセンのみが判決発見者でありうるのである。民族から王に移った主権をそうにして王と再び分け持ったところの封建貴族は、自己の内部で、さまざまの方法において編成された。フルストたちと自由な主人たちは、政治的な点においては、封建貴族におけるより狭いゲノッセンシャフトであるが、しかしすべての階級諸法において自由な主人は、フルステンゲノス (フルスト「侯爵」仲間)⁽¹⁸⁾である。差異は、職務と支配の差異をとおして、とくにしかし中世の観方からはヘルシルト (Heerschilde「封建法上の権利能力」) の概念をとおして表現される⁽¹⁹⁾封建的な等級をとおして、多くの関係において基礎づけられている。しかしながら封建王政が存在した限りで、それでもやはり上級貴族全体が、たんに婚姻、敵対および裁判所のための一つの階級ゲノッセンシャフトであったのみならず、帝国集会への参加に關してもまた、本来的な法的差異は存在しなかった。やがて後に帝国の階級制度 (Reichsstandschaft) がただ領土によってのみ条件づけられ決定されたとき、王の選挙権者 (Königswähler) の優遇された一団が分かれ、帝国諸都市が主人たちと並んで登場したとき、帝国の封土ゲノッセンシャフト的な性格は停止し、そして、諸階級のコルボラチオンへの帝国の変化が開始した。

帝国におけると類似して、帝国の諸部分において、貴族のファツサルレン「廷臣」間の封土ゲノッセンシャフト的な関連が、それゆえかなり古い時代において、とくにヘルツォーク「大公」領 (Herzogthümer) において、後にはラント居住の主人たちの座席 (Herrenbank) の形成へと至ったより大きなフルステン領 (Fürstenthümer) において、形成された。

上級貴族と全く類似して、いまや次第に〈最終的に同様に貴族となり、そして、より低位の貴族として完結した〉第二の階級が成長した。この階級の形成にもまた、封土ゲノッセンシャフト的な諸関係が非常に大きな影響を与えた。なるほどザクセンシュビーゲルの参審員となりうる自由民 (Schöffenbarfreien) は、封土関係への参加とおして彼の階級的権利は減少しないが封土を必要としない、完全私有の階級であるが、しかしながら彼らは、すでに貴族の廷臣たちと同一のヘールシルトを有している。⁽²⁰⁾ シュワーベンシュビーゲルにおいては、これとは反対に、中間自由民 (Mittelfreien) という対応する階級において、たださらに最高自由民 (Höchstfreien) の封建臣下たち (Lehnmänner) が現れ、それゆえ⁽²¹⁾ここでは階級法の基礎が封建的なものとなっていた。参審員となりうる人々は、封土を受け取ったのであり、そして、この封土の関連が、彼らを普通自由民の上に持ち上げたところのものであり、封土の関連なしには彼らの階級の諸権利は中止したのである。自由なファッサレン (廷臣) というこの階級は、その後更なる発展の中で、ミニステリアーレンであることから単なる物的な従属性へと高まる全ての諸要素を吸収する。それによってしかし、封土占有者のゲノッセンシャフトは、かつての奉仕臣下 (Dienstmannschaft) にも拡大され、特別のミニステリアーレン団体を吸収し、そして、「騎士階級」(Ritterschaft) という名称のもとに、同一の主人からの封土を有する全ての人々の団体となる。皇帝だけを主人として認めることに成功するこのクラスの構成員たちは、帝国騎士階級 (Reichsritterschaft) となる。⁽²²⁾ これとは反対に、フルスト的権力が封土従者 (Lehnseute) の上に貫徹したところでは、〈主人に助言を与え、ラントと従者の処分を制限し、相互的な権利と義務、租税の同意などについて主人と協議し、法を指示し、判決を発見する〉ラント在住の騎士階級が成立する。聖職者と世俗人の大物たち、ファッサレン (廷臣) とミニステリアーレンが現れるかつての荘園会議 (Hoflage) の代わりに、ラントの封建的ゲノッセンシャフトを完全な純粋性において示す極めて統一的な騎士会議が登場する。⁽²³⁾

この騎士階級の物的基礎は、やがてもはや一人の主人の騎士階級ではなく、領土の騎士階級が統一体を構成し、そして、ラントが他の諸ラントとともに同一の主人のもとに合一される場合にも、そのような統一体に留まることに、示されている。この発展全体の過程は、もちろんこの時期の終わりになって初めて開始し、そして、中世の終わり頃に封土制度に対立するアイヌング制度(Einungswesen結社制度)の影響のもとに終結に至るのであり、そこで初めて、「二方では」、騎士的な団体制度をとおして〈階級の一部に帝国自由権(Reichsfreiheit)を保証し、他の部分に領土における独立の地位を保証する〉⁽²⁴⁾ 確固としたケルパーシャフト的な組織がもたらされるのである、そして、そこで初めて、他方では、古い出生による差異〔世襲的差異〕が、下級貴族または騎士貴族という統一概念の中で消失するのである。しかしながら、同一のラントと主人の騎士的な封土占有者たちのゲノッセンシャフト的関連は、彼らの明示的なケルパーシャフト的な組織よりもはるかに古いものであった。⁽²⁵⁾

II. 下級貴族の形成と完結にとつての最大の意義をもつたのは、封建法によつてもたらされた物的従属性を通しての人的従属性の吸収と並んで、人的な種類の第二のファクターである「騎士道(Ritterhum)」と「騎士の品位(Ritterwürde)」⁽²⁶⁾であった。すでに早期に、とくにしかし十字軍以来、戦争の騎兵勤務(vita militaris軍人生活)の職業的従事は、あらゆる他の職業生活よりも名誉あるものであり、それゆえ自らをそれに捧げる者にはより高い人格的な品位(Würde)を付与する、という観念が登場した。民族の一部分が騎士的な生活方法を遂行し、他の部分に彼に農民的に生活する者として対立したことは、まずもって何か純粹に事実的なものではあったが、それでもしかし、やがて社会的な諸権利と諸義務の総体をもたらした特別の階級意識が、騎士たちの間に形成されざるをえなかった。政治的な法および私法における騎士の独特の人的な諸特権は、やがて社会的な地位に結びつく。とりわけ、しかし、戦争制度の本来的な封建戦争制度(Lehnskriegswesen)への変化とともに、〈農民からは一歩一歩完

全自由民の古い武器権 (Waffenrecht) が失われていった一方では、騎士たちにもみ完全な武器権が帰属する」という観方を形成することが開始した⁽²⁷⁾。武器権の差異は、ゲルマン的な観方によれば、常に同時に階級法の差異であり、そして、そのようにしていまや騎士たちは、独自の階級を構成した。この階級は、もちろん先ず最初は、〈同じ方法においてその階級に参加する貴族の人々、自由民および奉仕奴隷の人々の世襲的区別を否定しない〉⁽²⁸⁾ となる職業階級であった。しかしながら、その階級が全てのその構成員を騎士権 (Ritterrecht) および騎士慣習 (Ritterbrauch) との関連において相互に同列に置いたことによって、その階級は、全ての世襲的諸階級の改変、とくに自由なファッサルレン「廷臣」と非自由のミニステリアーレンの接近と和解とを本質的に促進せざるをえなかった⁽³⁰⁾。時代の経過の中で、これらの諸関係の更なる発展が、とくに、大規模なゲノッセン団体の理念が、キリスト教世界の騎士全体の間で形成されたことをとおして、登場した⁽³¹⁾。一部は、聖職者の教団への依存において、一部は、おそらくはまた既に世俗的なインヌング「同業組合」制度 (Innungswesen) の影響のもとに、ひとは騎士階級全体を、皇帝によって「盾の職務Schildesamt」をもって、すなわち、騎士的な戦争職業をもって、封土授与されている⁽³²⁾、大きな社團 (ordo militaris, s. equestris, militia 戦士団あるいは騎兵団、軍隊) と考えた。このたんに理念においてのみ存在するゲノッセンシャフトの現実的にケルパーシャフト的な組織は、もちろん問題にはならないが、しかしながら共通の騎士的な出自は、いまや一種の団体規則 (Ordensregel) (regula militaris 軍隊規則) として現れ、騎士の品位は、一定の権利と義務を基礎づける団体の構成員であることとして現れた。いまや騎士の品位 (des cin-
stulm militare 軍隊の帯) の付与、または、一人の騎士によってのみ執り行われるべき特別の行為としての完全な騎士的な武器権の付与が、慣習的なものとなり、その付与の中に、ひとは、次第しだいに騎士団の完全ゲノッセンシャフトへの採用を認めた⁽³³⁾。準備段階およびより初歩の騎士団の段階として、騎士の品位と並んで、従士 (Knap-

pen 盾持ち、*armiger* 親衛兵) および小姓 (*Pagen*, *pueri* 少年) という階級が登場した。⁽³⁴⁾ やがて後に国民の生活全体が諸ゲノッセンシャフトへと動けば動くほど、〈完全な権利を有し完全な義務を有するマイスターとしての騎士の品位の保有者がその中に存在する〉一般的な騎士同業組合または騎士ツンフトは、それだけ活発なものとなった。ひとが十四世紀においてそれについてどのように考えたかは、ウィルヘルム王のいわゆる刀札による騎士叙任式に関するベルギー年代記の偽書的な物語が、これを最も明瞭に示している。⁽³⁵⁾ 階級関係にとっては、しかし、ひとが、騎士の品位がそれ自体長い間まだ人的な特権に留まったのに対して、その付与のために、次第しだいに本来の戦闘の熟練と並んで、祖先たちの騎士的な生活方法を要求したことが、⁽³⁶⁾ 特別に重要なものとなった。そのようにして〈そこからのみ法に従って唯一騎士が採用されるべきである〉騎士身分の世襲階級 (*Geburtsstand*) が成立し、そして、それによって世襲階級としての下級貴族、すなわち、諸ケルバーシャフトとしての、騎士階級 (*Ritterschaften*) の発展のために、基礎が獲得されたのである。

Ⅲ. 我々が、共通の荘園職務の授与からの一般的な荘園ゲノッセンシャフトと並んで、ゲノッセンシャフト的な組織 (荘園法的な同業組合) をもつ特別の諸職務が、共同の奉仕職務 (例えば貨幣鑄造) からの奉仕臣下の団体と並んで、特別の奉仕法的なゲノッセンシャフトが、成長するのを見たように、一般的なファッサルレン [廷臣] 諸団体と並んでもまた、総体の封土授与に基づく特別の封建的な諸ゲノッセンシャフトが生ずることができた。なるほど、それ自体ある家族の幾人かの構成員に対する総体の手のためのドイツ法的な封土授与においては、まだゲノッセンシャフトは成立しなかった。なぜなら、たとえ封土被授与者の総体が封土担い手とおして主人に対する関係で代理されるとしても、それでもなお、ひとが封土授与された廷臣たちのケルバーシャフトについて語ることができた「という」意味における、総体被封土授与者たち (*Gesamtbelehnten*) の独立した法的な統一体は、存

在していないからである。⁽³⁷⁾しかしながら総体封土からは、それでもやはり時代の経過の中で、より狭いゲノッセンシャフト的な参加者たちの結合と団体的な組織の設立をとおして、真のゲノッセンシャフトが発展することができた。そして、真のゲノッセンシャフトは、事実、城または諸都市を伴う総体の封土授与 (*Gesamtbelehrung*) において、とくにその後のガウ相続財産的な諸ケルパーシャフトのいくつかにおいて、展開された。⁽³⁸⁾

【以上、第二十三章、終わり。】

【第二十三章の注】

注(1) 諸法書 (*Rechtsbücher*) が明示的に廷臣 (*Vasalle*) をラント裁判所の前においている諸場合については、ホーマイヤー (Homeyer, *System des Lehnrechts* II, 565–567.) を参照せよ。

注(2) Eichhorn, R.G. § 345a. 364 f.

注(3) 十世紀の終わり以来、しばしばファッサルレン (「廷臣たち」) は直接に主人に対して、彼を封建法の設定または変更に関する形式的な諸契約の締結、とくに相続可能性の承認へと強いるために、忠誠を誓った。Eichhorn, R.G. § 259. Note b u. c. Unger, *Landstände* I, 121.

注(4) Schon nach Const. Conradi II. v. 1037—Eichhorn § 303. Note i, 259. Note b—und nach einer Urk. v. 1084 aus Kremer, orig. Nass. S. 114 u. 115 bei Maurer, *Fronh.* I S. 488. Note 64: 「もし彼らの仲間たちの裁判所に服するのでないならば、… 正当な裁判所に、彼らの仲間たちの利益を私から提出することを裁判所が義務つけたゆえに、裁判所のために入手する義務を私は負った。」 (*niſi parium suorurn subiacere iudicio; --- iusto iudicio suorurn parium beneficium, quod ex me tenebat fere, ei auferre debui.*)。

注(5) 見⁴。Maurer, *Gesch. der altgerm. Gerichtsverf.* S. 11–14, 65, 77. *Fronh.* I S. 157 f. 170 f. 184 f. 485 f. 次の異説を見

4°. Albrecht, Gewere S. 290 f. Eichhorn, R.G. § 303. Note i. Unger, alldcut. Gerichtsverf. S. 93. 264 f. Waitz, Verf. IV. S. 391. 後の二者 (ウンカーとヴァイツ) は、封土裁判権を最初から物的なものとなつてゐる。

注(6) 上述、第十五章を参照せよ。

注(7) Zöpl § 13. III. Walter § 260.

注(8) Sachsensp. III. 64. § 5: 「王は、その裁判権が与へられてゐる者に対して、罰令権を付与せるハムを、正當に拒絶せらるべきなり。」 (die konig ne mach mit rechte nicht weigern den ban to liene dem it gerichte gelegen is.)。

注(9) Sachsensp. I.c.: 「罰令権を拒むるは従者にして罰令を拒むるは (ban liet man ane manscap)。」

注(10) Sachsensp. III. 52. 53. 58. 60. 62. Schwabensp. Lassb. c. 119-123. 131. 132. 139.

注(11) Zöpl § 13. Eichhorn § 290.

注(12) Vgl. Kaiserr. III. c. 6: 「dienstamt des kaisers (皇帝の奉仕職務)」、Schwabensp.c. 131. 139. Sachsensp. III. 58. § 2. 皇帝は、フルステン職の直接の付与から、シムフーレンシムブーゼンは、Fürst、この語は「vorderst emphat

her (第一等の受領者)」と説明してゐる。それゆゑフルステン概念は、この「廷臣」であるハム (Vassallität) から結果する帝国に對する戦争奉仕義務もまた、本質的であるとなされる。angebl. Priv. f. Oesterreich v. 1156

Pertz I. II. 100. 参照せよ。Homeyer, System des Lehnrechts § 62. Schulte, R.G. § 72. Walter, R.G. § 259. 同。

注(13) Vgl. Zöpl § 13. Schulte, R.G. § 84. 89. Walter § 259. 260. 262-264.

注(14) ハムをシムフーレンシムブーゲルは「Semperfreyen (つねに自由民である者)」の特徵的メルクマールとみなつてゐる。「ハムは我々は三様に自由なひとびとになつて言う。すなわち、彼は、常なる自由民であると呼ばれ、フルストとして自由な主人であり、そして、その他の自由民を臣下として有するハム (ハム)。」 (Hie sagen wir von drierhande vrien luten. Der heiszent eine semper vrien. daz sint die vrien herren. als fürsten und die ander vrien ze man habent.)。

注(15) Zöpl § 48. II. は「正當にも言っている。ドイツの帝國議會は、國家組織がその中に移行していた封建システムの結果として」「封建議會」(Lehnskurie)の形態を受け取った。」と。

注(16) より古い帝國議會決議は、それゆゑ形式上もまた、ヴァイステューマーまたは判決(Urtel, sententiae)として現れている。例えば、フュルストたちのためのフリードリヒ二世の諸憲法(Konstitutionen Friedrichs II)のやがこれらの諸法律は、基本的に契約(Verträge)である。そして、帝國の由来についてもまた欠けていない。Cf. Eichhorn, R.G. § 260, Zöpl § 48.

注(17) Schwabensp. c. 125: 「フュルストの身体に關しておよび彼の健康に關しては、王以外の何びとも裁判官であるべきではない。」(über der fursten lip und ober ir gesunt sol nieman rihter sin wan der konig.)。同様じ、Sachsensp. III, 55. Eichhorn, R.G. § 293, Phillips, R.G. S. 268.

注(18) Glosse zu Sachsensp. III, 58. Schwabensp. c. 121, 123. 自由な主人は、それゆゑ王に選定される。

注(19) Zöpl § 16. Fürth, Ministerialen S. 106 f. Eichhorn § 294. Grimm, R.A. S. 467 f. Homeyer, System des Lehnrechts S. 291-295. Maurer, Fronh. II, S. 31 f. Phillips, R.G. S. 215. Sachsensp. I, 3. Swabensp. c. 2. ヤンヤンントール・ノーン法Sächs. Lehn. c. 80. § 245 「クールシルトの仲間」(genot anne herschilde) について語っている。注(20) Sachsensp. III, 81: I, 3. § 2: 「裁判官となりうる人々および自由民たる主人たちの従者は第五の(クールシルト)を「有する」」(de scepenbaren lude unde der vrien herren man den vetten (herschilde))。

注(21) 「ヤンヤンントール他の自由民の従者であるその他の人々は中間的自由民と呼ばれる。」(so haizent die andern mittel vrien: daz sint die ander vrien man sint.)。

注(22) Das kleine Kaiserr. III, c. 5. ちやびに帝國の騎士階級について語っている。帝國騎士階級の成立について、Roth v. Schreckenstein, Gesch. der ehemal. freien Reichsritterschaft Bd. I. Tübingen 1859. Bes. S.18 f. 544 f.

注(23) 領土における莊園會議および騎士會議(Hof=und Rittersage) による有効性について、Unge, Landstände I, S.

105-286. ウンガーは、それにもかかわらず古い莊園會議にあまりにも国家的な性格を帰属させている。

注(24) 以下、第五十一章を参照せよ。

注(25) ロート・フォン・シュレックケンシュタイン Roth v. Schreckenstein は、不適切にはなく、従属的な (subordinari) ステリアーレンの) ゲノッセンシャフトとしての騎士連盟を (莊園法的な同業者組合としての自由なツンフト) 類似の關係へと置いてゐる。Ic. S. 248, 309.

注(26) Vgl. Hülmann, Stände II. 301 f. Eichhorn, R.G. § 223, 241, 242, 341. Fürth, Minist. S. 64-95. Stenzel, das Kriegswesen des Mittelalters S. 96 f. Philips, R.G. § 84. Zöpfel § 17. Walter § 218, 219. Schulte § 83. Roth v. Schreckenstein I. c. S. 160 f. 192 f. 288 f.

注(27) 騎士權 (Ritterrecht)°。例へば、Kaiserr. III. c. 8.—Frider. const. de pace ten. 1156 c. 9, 10. における武器能力と裁判的決闘の特權。諸シュピーゲルによれば、免稅特權 (Zollfreiheit) (Sachsensp. I. 27. § 2. Schwabensp. c. 218. § 2) およびモルゲンガーベ (Morgengabe (新郎が結婚の翌朝新婦に与へる贈り物)) (Sachsensp. I. 20. Schwabensp. c. 18) の特別の程度も。Fürth S. 74. besonderes Strafrecht ib. 73. における、フェーデと盟約の權利。——固有の騎士の占有權 (Besitzrecht) に関する Urk. v. 1272 Gud. III. 1146 を参照せよ。すなわち、「騎士のゲヴェーレと言われる古い軍隊法に従つて」(sequendum antiquum jus militum quod Rittersgewer dicitur)°。

注(28) Fürth S. 70 f. Zöpfel I.c. Roth v. Schreckenstein S. 100. Note 2. における貴族たる騎士の諸例。Hülmann I.c. Fürth S. 67 f. Maurer, Fronf. II. 29 f. Ennen, Köln I. 448 f. Schwabensp. c. 301. III. § 9. における、奉仕奴隸および非自由の騎士たちについて。

注(29) Das Kaiserr. III. c. 1 は、騎士を皇帝のゲノッセン (仲間) とする名づけている (「そのとき彼は、彼らを取り立てて彼の仲間と」--- 彼は騎士の名を与へた。] do nam er die und machte sie sin genoz --- un gab in ritters namen.)°。

- 注(30) Vgl. Eichhorn § 341. Hüllmann, Fürth, Maurer, Zöpfl l.c.
- 注(31) Hüllmann S. 303 f. Eichhorn § 241. Fürth S. 65. 66. Walter § 219. Schulte § 83. Stenzel l.c. S. 98-100. Roth v. Schreckenstein S. 198 f. Kurt v.d. Aue, das Ritterthum und die Ritterorden. Merseburg 1825. S. 11 f. 14 f. 18 f. 23 f. 35 f.
- 注(32) 庇護の職務 (Schildesamt 桶の職務) に従いつ騎士の総体とのとのみたdes schildes ambet (庇護職) と呼ばれる。例えは、Parzial (ed. Lachm.) 621. 7. —Kaiserr. III. c. 1. じやうじは、騎士はdienstlute des riches (帝国の奉仕従者) と呼ばれてゐる。Vgl. c. 4 ib : 「騎士は皇帝の我々世界の英雄である。彼は帝国に不服従であるすべての人々に対して彼の生命を賭ける。おのれよおのの勇氣をめぐりあふ。」 (der ritter ist ein userwelter helt des kaisers --- er sal (haben) eins lewen mut gen allen den sinnen lib zu wagen, die dem riche ungehorsam sin.)。Vgl. auch Fürth S. 65.
- 注(33) その場合の諸形式は、一部は宗教的種類のものであり、一部は戦闘力あるものとなつてゐる。Vgl. Walter § 219. Roth v. Schreckenstein S. 197.
- 注(34) Vgl. bes. Walter § 219. Note 3-8. 11-14. milites (扈從), Knappen (桶持) (knecht 騎士の侍臣、armiger 親衛兵、clients 家来、famulus 奴僕、serviens 奴隸) とPagen (小姓) (juniores 若者、puer 少年) の区別の類似性は、一方では、聖職者の教団 (Orden) 他方では、諸シメントに基つてのものである。それは、それゆゑ模倣は困難である。ひとは、それゆゑシメントシメント (Stenzel Einl. zur schles. Urk. = Samml. v. Tzschoppe u. Stenzel S. 248.) といふ、シメント秩序を騎士団の模倣に帰するものは、許されなく。——手工業との騎士制度の比較は、De la Curne de St Palaye, das Ritterwesen des Mittelalters, mit Zusätzen herausgegeben v. Klüber, durch. Z.B. I. 205.
- 注(35) 不真正といふことの証明は、Böhmer, Kaiserregesten zu Wilhelm S. 4. Fontes II. S. XLII. 物語のとの (Magnum Chronic. Belg. ad. a. 1247—abgedruckt b. Eichhorn § 241. Note c, Walter § 219. Note 9, Schulte l.c. Note 6) は、

おそらく十四世紀の諸形式を示している。それゆえ、騎士の品位の付与は、徹底して軍事的な同業組合 (collegium militare 兵士団体) への採用であり、団体規則への宣誓が行われ、団体の諸義務が莊嚴に引き受けられた。

注(36) 移行は、ここでは、相統制の浸透におけるように、全てのその他の諸関係へと実現された。騎士の息子たちの事実上の優遇が最初であって、この概念の高まる制限のゆえの法的要件が、発展の最終結果であった。Vgl. Const. Frid. I. 1156. c. 10. Sachs. Lehn. art. 2. § 1. Schwäb. Lehn. c. 1. § 6. Kaiserr. III. c. 1. 3. 5. —皇帝による賜暇 (Dispensation) 14 Otto Frising. Gesta Frieder. II. c. 19. 24 25 26 27. 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

注(37) より詳細なことは第二卷におさる。——Vgl. Homeyer, Sachsensp. II, 457–464. Stobbe, Zf. Rechtsgesch. IV, S. 245. 246. Beseler, D.P.R. §. 107.

注(38) 以下、第三十九章を参照せよ。

【以上、第二十三章の注、終わり。】

【以下、「B. 古代法の自由ゲノッセンシャフトの残存物 I. ドルフゲマインデとマルクゲマインデ 第二十四章」に続く。】

B. 古代法の自由ゲノッセンシャフトの残存物

I. ドルフゲマインデとマルクゲマインデ

第二十四章

そのようにして、一方では、より上級の種類のより下級の種類のヘルシャフト諸団体の中に、(その最終的傾向においてヘルシャフト的な紐帯を粉碎することに向かって努力する) 諸ゲノッセンシャフトが成立したのであるが、他方において、民族法の原初的なゲノッセンシャフトの破壊は、極めて深く封建システムがこれに関与したかもし

れないとしても、それでもなおドイツにおいては、決して一度も完遂されなかった。とりわけもつとも狭いクライスである「ドルフとマルク」において、グルントヘルのゲマインデと並んで、自由民の諸ゲノッセンシャフトが注目すべき数において、そして、本質的に変化されない組織において、中世を超えて及ぶまで存在し続けたのである。もちろんそれらは、グルントヘルシャフトの急速に成長する拡大とともに、絶えざる衰退において捉えられた。⁽¹⁾

極めて多くの自由なゲマインデは、九世紀および十世紀以来、まっすぐにグルントヘル的ゲマインデに変化させられた。あるいは、それらのゲマインデの中に、グルントヘルシャフトが成立した。そして、それらのグルントヘルシャフトの主人たちは、なるほど、先ず第一には通常のゲノッセンであり、それらの隷属者たち(Hörigen)と小農たち(Hintersassen)は従属的フーフエについてただ代理人としてのみゲノッセンレヒトを行使したのであるが、しかし、それらのグルントヘルシャフトは、時代の経過の中で、自由なフーフエを所有するフーフエ所有者たち(Hufnerフーフナー)とグルントヘルの小農たちと隷属者たちの一つのゲマインデへの結合と、および、それによつて大部分、マルク全体へのグルントヘルシャフトの拡大とを、結果として有した。⁽²⁾しかし、他人の土地に居住した自由な人々は、この時期においては、ほとんど至る所で、人的にもまた、彼らの主人に従属的であり、隷属者たちからほとんど区別されなかった。⁽³⁾しかしながら、それでもなお、まだ諸法書の時代まで、そしてその後も、たんに固有の農民的な占有制度⁽⁴⁾に基づく極めて多くの自由民のみならず、共同の自由を自らのために保持するマルクゲマインデとドルフゲマインデ全体の重要な数もまた、存在したのである。⁽⁵⁾

なるほど、「完全な自由」(Vollfrei)、すなわち人的な自由権と私有財産(Eigen)の減少なしに留まったのは、ただフリースラント、デイトマルシェン、そして、極めてばらばらであるがスイスおよび西部ドイツにおける、農民階級と諸マルクゲノッセンシャフトであった。しかし、「共同の自由であった」(Gemeinfrei)のは、《そのこと

が皇帝と帝国にやがてしばしばその後の帝国直接制 (Reichsunmittelbarkeit) への道を切り開いたのであるが⁽⁹⁾》
 村々と諸マルクが直接、皇帝および帝国のフォークタイ (監督官職) へと来たことであれ、「あるいは」、村々と諸マルクが世襲的な帝国役人のフォークタイ (監督官職) またはインムニテート主人たちのフォークタイ (監督官職) へと陥ったことであれ⁽¹⁰⁾、その住民がグルントヘルシャフトではなく、ただ保護フォークタイ (Schutzvogtei) にのみ服させられたところのすべての村々と諸マルクである。それによってやがてもちろん、自由と土地所有権は減少された。なぜなら、フォークタイの公課 (Abgabe) と奉仕を給付し、フォークタイの裁判所を訪問し、フォークタイの保護を認めた者は、もはや完全に自由ではなく、土地についての彼の権利は真正の権利ではなく、グルントヘルの所有物であるが、しかし、彼らは、それにもかかわらず自由でありかつ所有者であるに留まるからである。なぜなら、庇護フォークタイ (監督官職) (Schirmvogtei) が公的 (民族法的) 権力からのその起源を、そして、それによって一人のグルントヘルの私的フォークタイであることによるその内的な差異を、拭い去ることがなかった限りで、それに服せしめられた個々人と諸ゲマイндеは、民族とラント (領邦) の団体から排除されるのではなく、そこでのゲノッセンであり、そしてその結果としてラント法上の権利能力と取引能力をもち続けたからである。その総体において一人の単なる庇護フォークタイのもとに立つゲマイнде諸結合は、それゆえ、ラント法的な諸ゲノッセンシャフトのままであり、そして、さらに長い間、最も本質的な諸点において、それらに倣って形成された荘園法の諸ゲマイндеから区別された。自治と自律、役人およびしばしばさらにフォークト (監督官) と裁判官の自由な選択、裁判所と集会のより自由な諸形式は、いかにここでは総体権 (Gesamtrecht) が原初的な権利であった、たんに主人権から導出された権利ではないことを認識させた。とりわけラント法への参加は、自由な諸ゲノッセンシャフトと隷属的な諸ゲノッセンシャフトの間には、厳格な境界を引いた。自由な諸ゲマイнде (die freien

Gemeinden) は、対外的に行爲して登場するために、主人の仲立ちを必要としなかった。一つのヘルシャフト団体に制限されたいかなる権利も、家族、財産および帝国のためのそれら〔自由な諸ゲマインデ〕の権利能力と取引能力に制限を課さなかった。それらが訪ねたフォークタイ裁判所 (Vogelgericht) は、封土授与された公的裁判所の性格を有した。そして、その上、それらが裁判管轄権をもたなかった限りでは、フォークトたる人々は、直接ツェント裁判所およびグラーフ裁判所に参加した。それら〔自由な諸ゲマインデ〕は、帝国または帝国によって封土授与された軍隊命令権 (Heerbann徴兵権) の保有者に対して、戦争奉仕 (Kriegsdienst軍役) の義務を負った。それら〔自由な諸ゲマインデ〕のマルクに対する総体ゲヴェーレ (Gesamtgewere)、個別財産についての特別ゲヴェーレ (Sondergewere) は、ラント法およびラント裁判所によって所有財産 (Eigen) として承認され、そして、保護された。

時代の経過の中で、もちろん共同の自由が隷属性に向かい、〔また〕隷属性が共同の自由へと向かう持続的な傾向が、多様な変化をもたらした。大部分の自由なフォークタイのゲマインデは、グルントヘルシャフト的な諸ゲマインデに沈下し、ただ僅かなそれらだけが、フォークタイがグルントヘルシャフトへと変化しようとしたとき、スイスの自由な農民ゲマインデのように、フォークタイを再び振り捨てたのである。他の自由ゲマインデにおいては、自由民の数は減少され、そして、それによってまず最初は混合された諸ゲマインデが作られ、そしてそこにおいて次第に多くグルントヘルシャフトが優越を獲得した⁽¹¹⁾。隷属性と共同の自由が類似のものとなればなるほど、融合はそれだけいっそう容易となった。やがてひとは、もはや公的権力から導出されたフォークタイと、自己の主人権から流出する私的なフォークタイとを、区別しなかった。ひとは、自由民 (Freie) と隷属民 (Hörige) を同一の裁判所の前に立たせ、彼らに相互に判決を発見させ、そして権利を指示させた。それゆえ必然的に、一方ではラント

法が、他方では奉仕法または莊園法が、接近し、そして、最後には合流せざるをえなかった。自由民には莊園法的起源の諸制限が課され、隷属民は最も負担となるものから解放された。自由民は、インムニテートの拡大とともに多くの点においてラント法から排除され、ラント法による莊園諸団体の完全なまとまりという硬直した原則が破られた。さまざまなヘルシャフトの隷属民のみならず、さまざまな権利をもつ自由民と隷属民もまた、いまや平和共同体 (Friedensgemeinschaft) および法共同体 (Rechtsgemeinschaft) ⁽¹²⁾ の中で相互に立ち、そして、そのようにして、莊園団体に制限されることなしに、莊園団体の個々の諸部分を把握するマルクゲマインデと農民ゲマインデが成立した。最初はゲマインデ結合とマルク結合に単なるゲノッセンとして参加したにすぎない、完全自由のグルントヘルたちおよび参審員となりうる人々は、次第しだいに特権を与えられた地位へと、それどころか主人権へと、上昇した。かつては主人の代理人にすぎなかった彼らの子孫たちは、独自の権利を有するゲノッセンとなったのである。要するに、諸都市においては、全く類似の過程が全ての諸要素を自由へと高め、そして、自由な市民階級を創った一方では、ラントにおいては、(本質的に至る所でグルントヘル的で、それゆえに隷属的であった) 農民という唯一の職業階級の形成が準備されたのである。——なるほどこの農民階級は、自由からは(村とマルクのクライスのためにほとんど制限されない) 自治と自律を伴うゲノッセンシャフト的なゲマインデ組織体制を救い出し、または、取得したが、しかしながら、非自由からは、農民階級に、ゲマインデを超えて及ぶあらゆる独立した法的または政治的な結合からの——〔すなわち〕ラントおよび帝国からの排除が成立し、または、残った。そして、農民階級にはこの結合が欠けていたゆえに、グルントヘルシャフトの発展のその後の経過において、ラント高権 (Landeshoheit) とローマ法に対する関係で、ただそのゲノッセンシャフト的な組織体制を確保するだけの手段もまた有しなかった。そして、農民階級は、次第しだいにほとんど全ドイツにおいて政治的な非自由へとのみならず、

自己の案件における非独立性へともまた沈み込んだのである⁽¹³⁾。

それにもかかわらずこの発展は、後の諸世紀において初めて完成された。——すなわち統一的な奴隸的な農民階級の形成は、十三世紀以来（のことであり）、ゲノッセンシャフト的な自由の没落は、十五世紀以来のことである。我々の時期（第二期、八〇〇年ないし一二〇〇年）の終わりに至るまで、〈頂点にヘルシャフト権を伴う〉自由な諸ゲマインデと〈その中で諸ゲマインデが莊園法に従って生きたところの〉ヘルシャフト的諸団体との差異は、まだ極めて大きかったのであり、前者においては、ゲノッセンシャフトは後の時代におけるよりもはるかに自由であり、後者においては、はるかに制限的であった。それでもしかし、既に上述されたように、この差異は、〈莊園ゲマインデがその点においては完全にただ自由ゲマインデの模倣に過ぎなかった〉内部的な有機体組織の原則における以上に、総体権の程度と種類において、存在した。この原則は、しかし、徹底して最古の法のゲマインデゲノッセンシャフトの原則と同一であった。

我々は、民族法と十三世紀との間の時代からは、ドイツのラントゲマインデの内部的な組織体制に関する乏しい情報しか有していない。それだけいっそう豊かにその後の時代の諸原典が流れている。我々が、しかし、最晩期の中世のヴァイステューマーと最古の諸情報を伴う初期近世のヴァイステューマーを比較するときは、やがて民族移動の後にマルクゲノッセンシャフトおよびフーフェンゲノッセンシャフトとして形成されたとき諸ゲマインデは、その基本的特徴において（我々がただばらばらに十五世紀以来登場している法的構造物のみをより後のものとして排除するならば、我々に今日の状態の境界近くまで明瞭に立ち現れるところのもの）同一であることを、我々は認識する。ラント的ゲマインデの発展は、事実、非常にゆっくりとした発展であったので、それは、近世になってはじめて、都市ゲマインデが十二世紀において完成していた段階に到達したのである。法制史のどこ

か別の領域におけるよりも多く、ここでは、遅れたものからより以前のものが再構成される。

それにもかかわらず、ゲマインデ組織体制の我々にとって重要な側面のより詳細な叙述を、諸証拠文書がより豊かに提出されるその後の時期のために準備すること、そして、ただ一般的にはあつても（それらの上に自由なゲマインデが、そして、その模範に従つてヘルシャフトをととして引かれた枠内で莊園ゲマインデもまた、完成された定住以来基礎づけられたところの）諸原則をすでにここで手短かに性格づけしておくことは、目的に適っているように思われる。

とりわけゲマインデは、古代法の意味における「ゲノッセンシャフト」であつた。それゆえゲマインデは、（そこにおいて個々人の上にある総体が法的統一体の担い手であつたところの）平和団体であり法団体であつた。しかしこの総体は、全てのゲノッセン（仲間たち）の集会と同一であつた。まとめられた多数者とは異なる法的統一体は、そこには存在しなかつた。それゆえなるほど総体権、総体財産、総体利益は存在したが、しかしそれと区別可能なゲマインデ権、ゲマインデ財産、ゲマインデ利益は存在しなかつた。今日の意味におけるゲマインデは、そもそも存在しなかつた。

1. かつて純粹に人的な結合から生じたこのゲノッセンシャフトは、長い間その基礎において物的なものとなつていた。それは「マルクゲノッセンシャフトおよびフーフエンゲノッセンシャフト」であつた。

a. それゆえ、一方では、ゲノッセンの総体は、ある一定のマルクの（マルクなしにはそれが考えられない）付属物とみなされた。マルクについての総体権は、ゲマインデがまとめるところのもの、ゲマインデの名とその本質が決定するところのもの、であつた。それは、同時に、すべての集会、審議および法の判告（*Rechtsweisung*）の主たる対象であつた。それゆえいくつかのドルフゲマインデが一つの不分割のマルクをまとめる場合、それらはた

だ一つのゲマインデ (Eine Gemeinde) を構成したとしても、しかしそれは、マルクが完全に分割される場合には、直ちに崩壊した。より大きなマルクの内部では、〈大きなマルクについての持分と並んで、固有のマルクについての特別の総体権を、ドルフが占める場合⁽¹⁵⁾〉、そして、その場合にのみ、個々のドルフは、一つの特別のゲマインデであった。なぜならマルクゲマインデではないドルフゲマインデは存在しなかったからである。

b. 他方では、ゲマインデにおける構成員の地位は、マルクにおけるフーフエの占有に依存していた。土地占有をもたなかった者は、ただ保護ゲノッセンにすぎなかった。しかし自己の権利または導出された権利としてフーフエを占める者は、自己の権利または導出された権利としてもまた、完全なマルク利用と完全な人的ゲノッセン権を有した。さらにより広いそしてより狭い、物的ゲマインデとは異なる人的なゲマインデは、存在しなかった。なぜならあらゆるゲマインデは、フーフエンゲマインデであったからである。

2. しかし、もしそのようにあらゆるゲマインデがマルクゲノッセンシャフトおよびフーフエンゲノッセンシャフトであったとしても、それでもしかし、いかなるゲマインデも「ただ」これだけではなかった。むしろ、たとえ物的な基礎の上ではないとしても、それでも一定の独立性において、〈歴史的にそれがマルク共同体よりも古かったように、マルク共同体のみをとおしては決定されず限界づけられもしなかった〉「ゲノッセン (仲間たち) の人的結合」が存在した。

a. このことは、すでに、決してフーフエの取得だけで成り立っていたわけではない「ゲノッセンレヒトの諸条件」の中に示されている。むしろこれに加えるに、一定の人的な諸特性、とりわけ、しかし種々の諸条件と結びつけられた〈ゲノッセンシャフトへの〉一つの人的な採用が、要求された。逆に、全くまたは必ずしも十分には土地占有をもたなかった者もまた、それでもしかし一定の諸利用およびドルフ統治またはマルク統治への一定の参加が、

完全ゲノッセではありえなかったにもかかわらず、許された。そしてまた、後にしばしば問題となるように、どこでも、ゲノッセンレヒトは純粹な財産権ではなかったので、ゲノッセンレヒトをいくつかのフーフエの占有の場合には幾重にも一人の人に認め、任意のフーフエの分割によっては自ら任意に分割されたのであろう。それにもかかわらず、ひとは、すでにこの時期において、完全ゲノッセンと単なる保護ゲノッセンとの間に〈ひとがときおりすでに半ゲノッセンとみなした〉より僅かな權利を有するゲノッセンという中間段階を許すことを始めた。

b. ゲノッセンシャフト的な結合の「目的」と「対象」は、それゆえ、決してただ共同の農業経営 (Ackervirtschaft) および共同のマルク利用 (Marknutzung) だけではまたなかった。⁽¹⁶⁾ それらは、むしろ主としてはそうであった。しかしそれと並んで、相互的な扶助が生活のすべての生起において存在し、道德的および法的の場合宗教的でもあるゲマインシャフトが結合の内容であった。そして、自由なゲマインデは、いつでもさらに、ラントと帝国の政治的組織体制における重要な構成部分であった。それゆえ諸ゲマインデの代表者、裁判所および法は、たんにマルク問題および農地問題にとつてのみではなく、人的諸関係とゲノッセンシャフト的諸関係の多数にとつてもまた、権限を有したのである。大部分の場合、このことは、すでに、〈同時にツェント (Centen) ではなく、ツェントの中に存在する個々のドルフシャフトに対する関係で本来のゲマインデとして維持されたものでもない〉より大きなマルクの中では、背後に退いていた。それらは、最も早期に単なる経済的な私的な諸コルポラチオンとなつた。しかしながら引き続き時期においてすら、それらの中にさらにそれらのかつての広く及んだ意義の残存物が維持された。個々の諸ドルフにおいては、しかし中世の終わり以来はじめて、ときおり、〈同時に私的であり政治的である古いゲマインデが《それらの一方はそれらの私法的な側面を継続し、それら他方はそれらの政治的な側面を継続する》二つの諸ゲマインデに分裂したことによって》現実の私法的な諸マルクコルポラチオンの形成に

至ったのである。

3. (そのように物的基礎に基づくが、しかし同時に人的に緊密に結合した、先ず最初にかつ主として経済的利益に関わるが、しかしそれと並んで、ドルフまたはより大きなマルクにおける人間全体を把握する) ゲノッセンシャフトは、(浸透した主人権、または、一部分だけ除去されたにすぎない主人権をとおしての修正がもたらされなかった限りで) その「組織」(Organisation) において全く、最古のドイツ法のゲノッセンシャフトの諸特徴を示した。

a. ゲノッセンシャフトは、それゆえ、その固有の案件については、多かれ少なかれ完全な自治を享受し、ゲノッセンシャフトはその自治を、一部は、自ら通常集会または臨時集会に基づいて行使し、一部は、選ばれた代表者に委任した。もちろん、ヘルシャフト的な役人と裁判官が、ゲマインデ役人の上にはこれと並んで存在したが、しかし彼らの任命においてもまた、彼らはしばしば協働しなければならず、そのうえ彼らの作業クライス〔範圍〕はまさに、ヘルシャフト的諸権利の行使に制限されていた。他方では、これとは反対に、ゲノッセンシャフト的な諸職務もまた、時代の特徴に従い、世襲的となり、一定の土地の付属物となり、そして、しばしば、マルク長(Obermäker) におけるように、最終的には主人権へと変化する固有の権利となった。

b. すべてのゲノッセンシャフト的な案件について管轄権をもち、そして、ゲノッセンのもとで判決を発見した、固有のドルフ裁判所とマルク裁判所が存在した。

c. ゲノッセンシャフトは、固有の財産、および、とくに外部に向かつては完結した財産を持ち、内部に向かつては、古い諸原則に従って分配された土地についての総体権(Gesamtrecht/総有権)を有した。

d. あらゆるゲノッセンシャフトのように、あらゆるゲマインデもまた、それらが取り扱った特別の平和を有し、

それらがゲノッセンシャフト的に、すなわち、出自、法の判告および任意決定をとおして形成した、特別の法をした。

【以上、第二十四章、終わり】

【以下、第二十四章の注】

注(1) Vgl. bes. Maurer, Einl. S. 288 f. Fronh. I S. 273 f. III. S. 1 f. Dorfvert. II. S. 191 f.

注(2) 彼によって“混合された”と名づけられたこれらのドルフゲマインデとラントゲマインデについては、Maurer, Einl. S. 299 f. Markenvert. S. 69, 87 f. 441 f. Dorfvert. I. S. 12 f. 79 f. 94 f. II. 167 f. 200.

注(3) Eichhorn, RG. § 343. Note de h. i. Maurer, Fronh. I. S. 106 f. II. S. 7 f. Gaupp, Ansiedl. S. 577. Stobbe, Z.f. deutsches Recht. Bd. 15. S. 311 f. Abhandl. über die Stände des Sachsenspiegels. Sachsenmeister (Sachsensp. I. 2. § 1. III. 45. § 6) のラントギーヤン (Landseten) は、まだゴークラーフヤン (gogreven) の裁判所すなわちシェント裁判所 (Centgericht) (Stobbe, die Gerichtsverf. Des Sachsenspiegels, Zeitschr. für deutsch. Recht. Bd. 15 S. 82 f.) を訪問したが (Sachsensp. I. 2. § 4) 、“しかし、罰金と殺人賠償金においてはもはや奴隷たち (Hörige) からほとんど区別されず (III. 45. § 7と比較された III. 45. § 6) ”、それどころか「通常人的に保護奴隷となった解放された固有の人々が、いまや自由なラントギーヤン (Landassenラント居住者たち) の階級に入るべきである (ib. I. 16; III. 80. § 2. Schwabenspiegel c. 135. Richtsteig Landr. c. 24) 」ことをおしつゝ、奴隷たちと同列に置かれる人々である。

注(4) ザクセンシュピーゲルにおいては、彼らは、彼らの奉仕義務と保護義務の差異に従って、プフレークハフテン (pleghafte 夫役義務者) とビールゲルデン (biereiden ナップ受領者) に分けられてゐる (I. 2. § 1 u. 3; Stobbe l.c. S. 356, 357) 。そして、彼らの財産 (egen 所有地) について言及されてゐる (I. 2. § 3; III. 45. § 5, 80. § 1) 。そして、彼

らは、類似性なき公然たる特異性である」とに (Stobbe S. 112)。⁷ グラーフたちの代理人 (旧副廷臣 *vicecomes*, Stobbe *lc. S. 98*) であるシュルトハイス (Schultheiss, 市町村長) を前にして、法を判断しそして発見するために、⁸ ツェント裁判所から免責されている。シュルトハイスは、⁹ しかし、公的な役人である (Stobbe *lc. S. 111*, Unger S. 310) は、¹⁰ ヘルシヤフト的裁判官を考えている。¹¹ Gaupp, *Recht der alten Sachen S. 24* は、¹² 複数のシュルトハイスを認めている。¹³ 彼らがより重要な問題において招待されたグラーフ裁判所における参審員資格 (*Schöffenbarkeit*) を、共同自由民たち (*Gemeinfreien*) はすでに失っている。

注(5) とくに¹⁴ Maurer, *Markenv. S. 94-102*, *Dorfverf. I. S. 6-10*, II. S. 365, 368 が集めた諸例を参照せよ。

注(6) しかし原初の諸州 (*Urkantonen*) においてすら、諸ゲマインデと諸マルクゲノッセンシヤフトは、ひとがおそらく認めたように、必ずしもつねに古い完全自由を維持していたわけではない。その大部分は、隷属性に陥っており、ほとんどの自由な土地所有権者たちは、少なくとも貴族および世襲のグラーフのフォークタイ権力へと陥っていた。¹⁵ 十三世紀の経過において初めて、スイスの農民たちは、抑圧された完全自由を再び獲得し始めた。¹⁶ Blumer, *Staats- und Rechtsgesch. der Schweiz, Demokratien I. S. 12 f. 77 f. 117 f.*

注(7) それゆえ、例えば、一七二二年においては、¹⁷ ヘルンハイム村 (*Dorf Bernheim*) は、まだ完全自由であり、¹⁸ そしてこの年に初めて、自由な決定に基づいて、¹⁹ 皇帝のフォークタイに自らを委ねた。²⁰ Urk. Frid. I. von 1172 b. Höfer, *Zeitschrift für Archivkunde II. 486*: 「ヘルンハイムの農夫たちは、全員一致の合意によって〈自由にそして急速にそして全ての支配から自由にされた〉彼らのB村をそれまで占有してきたが、まさに次の契約から、〈彼ら自身と彼らの全ての人々の子孫が毎年二十五ディオスの小麦を帝国に支払い、そしてその他の点では、彼らは、帝国の高所の保護の支配下においてすべての暴君支配から安全に永続するために〉、我々の統治に服従した。」(*villani in Bernheim unanimi consensu villam suam B. quam libere et propere et ab omni dominio solutam hactenus possiderunt, potestati nostre subiecerunt, eo videlicet pacto, ut ipsi et omnis eorum posteritas 25 modios tritici singulis annis imperio*

persolvant et de cetero sub imperialis celsitudinis tuitione ab omni tyrannide securi permanent.)。

注(8) そのようなフォークタイ(監督官職)のもとに、既にその名が言うように、ザクセンシュビーゲルのプフレークハフテン(夫役義務者たち)もまた立ったのである。彼らは¹⁾ liberi malmanni(自由民たる食客)²⁾ muntmanni(保護従者)³⁾ homines advocatitii(法律顧問官たる人々)⁴⁾ Vogtleute(監督官職の人々)などとも呼ばれる。Vgl. Zöpfl § 15, Note 3. § 30, Note 4. Maurer, Fronh. II, S. 7 f. Eichhorn § 343.

注(9) Maurer, Dorfv. II, S. 364 f. Fronh. IV, 390, 391. を参照せよ。

注(10) スイス、エルザス、ウェストファーレン、チロル、シュワーベンなどにおいてそうである。Maurer, Dorfv. I, S. 9, Markenv. S. 97.

注(11) ただ幾つかのグルントヘルシャフトが集合しそしてヘルシャフトの共同の行使に關して意思を疎通することができたところでのみ、混合したゲマインデ、または、時折は隷属的なゲマインデすらが、自由を維持しまたは獲得することに成功した。Maurer, Fronh. IV, S. 474-476. Dorfv. I, S. 9, 10. Grimm, W. I, 129. 帝国がグルントヘルシャフトを有した村々においてもまた、このことが登場した。Maurer, Dorfv. II, S. 365 f.

注(12) 莊園組織と村組織の關係については、Maurer, Dorfv. I, S. 115-120. をみよ。マウラーは、しかしながら、必ずしも十分には、〈フロンホーフ団体を超えて及ぶマルクゲマインデへの隷属者たちの直接の参加は、彼らの隷属性の一部分の中止を含んだのであり、したがって後の時代になって始めて所屬することができ(る)ことを顧慮していない。もともとは、なるほど、ヘルシャフト団体の一部のみを把握した特別のホーフ〔莊園〕マルクゲマインデが、ヘルシャフト団体の「内部で」成立することができたが、別のヘルシャフト団体または自由の中へと及ぶゲノッセンシャフトには、これとは反対に、ただ主人だけが、参加することができた。ただ極めてゆつくりそして自由と非自由の融合によつて初めて、このことは変更されえたのである。主人の名において主人のゲノッセンレヒトを行使し、そして、主人によつて代理されてゲノッセン裁判所において出頭しそして保護を見出した、隷属的な小作農民(Kolone)たちは、

最後には、〈彼らがそこにもはやたんに主人の「ため」にのみではなく、主人と「並んで」および主人「なしでも」また参加したところの〉マルクゲマインデの直接の構成員とみなされ、そして、彼らはいまや、同時に直接、マルク裁判所とマルクレヒトのもとに、そして、荘園裁判所と荘園法のもとに、立ったのである。

注(13)

以下、第五十三章、第五十五章を参照せよ。

注(14)

トゥーディッフム (Thudichum) は、より古い状態とより新しい状態の同一視においてあまりにも遠くまで行き過ぎている。

注(15)

このことは、それにもかかわらず必ずしも必然的に不分割のマルクであることを必要としなかった。分割されたフェルトマルク (耕地マルク) についての個々のドルフマルクの排他的総体権もまた、ドルフにゲノッセンシャフト的な独立性を与えた。

注(16)

このことは、最も広く流布された誤りのひとつである。第八章の注(35)を参照せよ。

注(17)

ザクセンシュビーゲルにおける村長 (Bauermeister) の裁判所は、これであり、そして、それ以外のものではない。Sachsensp. I, 68 § 2; II, 13 § 1-3, 55; III, 79 § 1, 86 § 1, 2. それに「*Stobbe, Zeitschr. f. deut. R. Bd. 15, S. 114*」をみよ。シュトツベは、しかし (Note 84) 農民裁判所 (Bauengerichte) を「*ヴァイツ (Waitz)*」とともに新たな起源の制度とみなしている。(第八章の注(38)を参照せよ)。シュトツベ (Stobbe S. 116) は、選挙が言及されていないことから、村長はつねに任命されていることを結論している場合にもまた、正当ではない。

【以上、第二十四章の注、終わり】

【以下、「II. 諸ツェント、諸ガウおよび諸ラントの諸ゲノッセンシャフト 第二十五章」に続く】

II・諸ツェント、諸ガウおよび諸ラントの諸ゲノッセンシャフト

第二十五章

そのようにして、ゲマインシャフトの経済的側面が前面に現れるドルフとマルクにおいて、豊かなゲノッセンシャフト的生活が受け取られたままに留まった一方では、より大きなとりわけ政治的に重要な民族諸ゲノッセンシャフトは、はるかにより高い程度において解体された。そしてそれでもしかし、それらにおいてもまた、封建システムは、ゲノッセンシャフトの理念を完全にも、至る所でも、否定することはできなかった。

I・二重の側面から、すでにメロヴィング朝の時代において、長い間すでにラントの対応する構成の原因であるより以上に結果である、自由なフンデルトシャフトの、ガウの、そして、部族の、諸ゲノッセンシャフトの解体が、〈第一には、インムニテートをとおしてヘルシャフト的な諸団体がそれらから除外され、第二には、しかし、それがヘルシャフトの地区へとすら変化させられたことによつて〉⁽¹⁾、始まつていた。二つの点において、初期のカロリング朝時代の力強い手は、促進する以上に妨げた。九世紀半ば以来、解体は、それだけ一層速やかな歩みをもつて前進した。

「インムニテート」(治外法権)は、外延的にかつ集中的にたえず広く拡大された。とくにザクセンの皇帝たちによつて、絶えずより大きな諸地区が、一部は、(後に、より小さな部分として帝国直轄領となり、より大きな譲渡と質入に服し、または、諸フォークト(監督官)自身の世襲的な占有に入らんがために)自己のインムニテートの中に取り込まれ、そして、帝国諸フォークト(監督官)のもとに置かれ、一部は、(ヘルシャフト的な諸フォークトのもとで古い民族秩序から疎外されんがために)、聖職者および世俗的なグルントヘルたちに付与されたのである。インムニテートには、しかし、もはやたんに自由な小農たち(Hintersassen)のみならず、閉じられたインム

ニテート地区の内部に居住した、自己の土地に基づく自由民もまた、服した⁽³⁾。そして、インムニテートの主人たち、とくに司教職 (Bischof) に、そして、ほとんどすべての大修道院長職 (Abteien) には、この地区のために完全なグラーフシャフト権力が、それどころか、時折すでに完全なヘルツォーク権が固有のヘルシャフト権として与えられた⁽⁴⁾。

同じ目標にしかし導いたのは、別の側面から、公的権力の領主制 (Patrimonialität) とともに登場する「ヘルシャフトへの諸職務の変化」であった。カロリング朝の時代においては、理念に従って、ツェント、ガウまたはプロヴィンツの全ての代表者の職務の性格が徹底してまだ確定されていた。中央集権的な行政の意味において、〈王のヘルシャフト権限を一定の地区の内部で行使しなければならなかった〉王の罷免可能な従者である彼らは、任意に任命された。いまだ力強く生き延びている民族観の意味においては、彼らは、最上位の裁判官でかつ軍隊指導者としての王によって任命された〈完全仲間としての地区のすべての完全に自由な土地占有者たち、保護仲間としてのその他の住民たちから構成され、定時裁判集会 (ungebotene Dinge) と臨時裁判集会 (gebotene Dinge) において自治、判決および自律を行使し、外部に向かっては、しかし独自の法的実体 (Rechtskörper) および軍隊 (Heer-körper) として現れた⁽⁵⁾〉〈自由なツェントの、ガウのまたはラントの〉ゲノッセンシャフトの裁判官であり軍隊指導者であった。九世紀の半ば以来、二つの点において、職務の観念 (Amtsidee) は次第に消滅した。民族の職務の性格は、至る所で完全に後退し、帝国の諸職務は、しかし、領主制的な意味における不動産的諸正義 (Immobiliargerechtigkeiten) となった⁽⁶⁾。ベネフィキエン (Beneficien 諸ベネフィキウム、諸特権) と結合して、諸職務は、やがてベネフィキエン占有の原因ではなく、その結果または付属物とみなされた。そして、その用益的な側面をあらわに示すことに基づいて、自らベネフィキエンとなった。諸職務は、ベネフィキエンからレーエン

(封土) に変化し、そして、レーエンと同様に、最初は事実に、やがて法的に、世襲のものとなった。⁽⁷⁾しかし、レーエン占有がそれら「ベネフィキエン」について可能であったとすれば、ひとは、それらを完全私有地的 (p^{ri} v^{at} e) に占有することもできた。その他の帝室領地のように、それら「ベネフィキエン」は、それゆえ、所有権としても贈与されまたは譲渡された。⁽⁸⁾皇帝がそれらを封建的または完全私有地的な権原のもとに譲渡することができたときは、その保有者もまた、それをさらに封土授与し、売却し、贈与し、質入れることができた。⁽⁹⁾最後に、そこから、量的ならびに質的な分割の可能性もまた生じ、そして、職務 (das Amt) は、インムニテートの主人の権利からものはや区別されない。領土についての物的なヘルシャフト権 (支配権) となっていた。

個別においては、この発展は、もちろん極めて不ぞろいなものであり、そして、極めてさまざまな時代に完成された。諸グラーフシャフト (Grafschaften 伯爵領) は、すでに十一世紀においては、ただ例外的にのみまだ職務であり、原則としてはしかし封建的な、(皇帝から直接であれ、第二の手からであれ) より良いまたはしかし (とくに聖職者たるインムニテート主人の場合には) 完全私有の世襲財産 (Erbgut) (patrimonium 世襲領地)⁽¹⁰⁾であった。多くの扈從たち (Komitale) はすでに一人の手に合一され、一人の扈從は、グラーフシャフト権をもつより小さな部分へと分割されることができ、⁽¹¹⁾あらゆる種類の譲渡が登場した。⁽¹²⁾そして、すでに十世紀において、一人の少年がグラーフであること、婦人たちがグラーフシャフトを、相続し、嫁資 (Mitgift) または持参金 (Mitum) として受け取ることが、可能であった。同じ運命を持ったのは、大抵の場合、諸グラーフシャフトであった。それらは、あるいは完全私有地 (Allod 世襲領) として、あるいは帝国封土 (Reichslehen)、ヘルシャフト封土 (Herrschaftslehen)、またはグラーフ封土 (Gräflchen) として世襲的となり、そして、その保有者たちは下級グラーフ (Untergrafen) またはラント裁判官 (Landrichter) となり、しばしば完全なグラーフ権力を獲得した。それゆえ、生殺

与奪権 (Blutbann) を持つ多くのツェント裁判所が存在したのである。⁽¹⁴⁾ マルクグラーフシャフト (辺境伯領 Markgrafschaften) とプファルツグラーフシャフト (宮中伯領 Palzgrafschaften) は、同様に世襲的であり、最後には、しかし、最上級のそして最重要な帝国職務となり、そして、それは、カロリング王朝と特使制度 (Sendbotenrichtung) の崩壊後は、諸部族の頂点に再び築かれたヘルツォーク職 (大公職) が次第に世襲的なヘルシャフトへと変化した。⁽¹⁵⁾ なるほど、まさにヘルツォーク領においては、この変化が、王および間接性によって脅かされた実力者たちが共通の危険に対して同盟したことによって、最終的な破壊へと導いた。⁽¹⁶⁾ しかしそれをおして、ヘルツォークの諸権利の主人権への変化は、ただ促進されたにすぎない。なぜなら、ヘルツォークの権力は、皇帝には戻らず、それらが個々の免除された司教たちやマルクグラーフたちに前もって帰属していたように、〈自らのために独立性をもしかするとあるかもしれないより強力な隣人たちに対する関係で完全に確保することができた〉いや全ての世俗的および聖職的な実力者たち、司教たち、大修道院長たち、称号所有のヘルツォークたち (Titularherzöge)、グラーフたち、自由な主人たちに移転したからである。ヘルツォークの名をもつて、または、ヘルツォークの名なしに、すべてのこれらの領地の主人たちは、かつてヘルツォークたちが有したように、いまや直接、帝国から最上級の裁判権と軍隊権力を有し、そして、この視点から、「フルストたち」として主人階級のその他の構成員たち (封土授与がなされないグラーフたちおよび自由な主人たち) から区別された。もちろんこの場合、ヘルツォーク職務の記憶が〈その理念上はまだ長い間フルスト制度が帝国官職とみなされた限りで〉⁽¹⁷⁾ 作用したが、事実上は、それにもかかわらず、次第に多くグラーフシャフト (グラーフ職) と同様に、〈主観的な関係においては、しは、僧院または修道院に属するか、またはファミリエに世襲財産として帰属するが、客観的な関係においては、しかしラントについての物的権利、すなわち、一二三二年のフリードリヒ二世の憲法 (Konstitution) ⁽¹⁸⁾ がすでに明

示的に名づけていたように「土地の支配権 (dominium terrae)」、であるところの「純粹なヘルシャフト権として取り扱われた。最初はまだ長い間必ずしも全部的には消滅していない職務理念が、通常確保されたフルストの諸職務の不可分性の中に表明されたが、⁽¹⁹⁾ それでもしかしそれに代わって、この時期の終わりには、ここでもまたそれだけより完全に純粹に私法的な分割システムが勝利した。⁽²⁰⁾

このすべてによる必然的な帰結は、ラントと民族の古い諸編成の外的及び内的な破壊であった。私法の偶然性に服するヘルシャフト諸地区は、公的な地区団体とラント団体の地位を取り込んだ。諸ツェントは、いくつかの裁判管轄権地区へと分裂させられ、あるいは、独自の諸コミタート (Komitate) となった。諸ガウは、ほとんどどこでもはやグラーフシャフトとは一致せず、独立の諸地区へと相互に引き裂かれまたは結合され、そしてそこにおいて世俗人たる主人または聖職者たる主人が、私法的権原に基づくグラーフシャフト権を占有した。⁽²¹⁾ 部族の諸ラントそれ自体は、結局、そのフルストがヘルツォーク権を行使したところの独立した領土へと分裂させられたのである。すべてのこれらのヘルシャフト地区を帝国と結びつけ、そして、下に向かつては帝国に含まれるより狭い諸ヘルシャフトを結びつけた統一的な紐帯は、次第しだいに、たださらに、封土 (Lehn) と封土誠実 (Lehnstreue) の唯一の紐帯 (Band) となった。⁽²²⁾

いかにしてこの発展が古い民族法的な諸ゲノツセンシャフトの生命神経を断ち切るかは、おのずから明らかになる。それにもかかわらず独立のゲノツセン団体という觀念は、政治的な地区の所屬員たちの間にいくつかの点において存続した。

1. すべての種類の眞の民族ゲノツセンシャフトは、もちろんただ「自由な裁判所ゲマインデ」——通常、ツェントゲマインデまたはゴーゲマインデ——が維持されたところでのみ「極めてばらばらに存続することができたに

すぎない。後期中世に至るまで、西部ドイツにおいては、〈皇帝のみを主人と認め、そして、皇帝をもまたただ保護主人としてのみ認め、彼らの地域のグルントヘルシャフトを占有し、彼らの裁判官をみずから選び、要求された事柄と要求されない事柄に対して自律、裁判権および自治を行使した〉自由民たちのそのような諸団体が登場した。すべての自由な土地占有者たちは、それらの諸団体の中で完全ゲノッセン〔完全仲間〕として同じ権利と同じ義務をもった。⁽²³⁾

2. しかし、一つのヘルシャフト地区に下位に位置づけられたかまたはそれ自体ヘルシャフト地区とすらなった「上級および下級のグラーフシャフト」においてもまた、居住者のゲノッセンシャフトという觀念が維持された。

あらゆるグラーフシャフトには、〈すべての自由な土地占有者たちがそこに出席する権利を有し義務を有したところの〉⁽²⁴⁾定時裁判集会 (ungebotene Dinge) (Landtage ラント議会) が対応した。十三世紀においては、まだ時折、真のラントの福祉に関して審議するラント集会として登場して、ラント集会は、もちろん一般的にはその政治的意味をファッサルレン (廷臣たち) およびミニステリアーレンたちによって訪問された荘園会議 (Hoflage) へと与えざるを得なかったが、しかし、荘園会議は、それでもやはり一般的な権利会議 (Rechtstage) の性格をもって存続し、そして、そこでは、主人またはその代理人の議長のもとに地区住民たちの総体の前で法律上の争訟が判決され、そして、法律行為が行われ、そして書面化された。⁽²⁶⁾より大きな諸グラーフシャフトの一般的な集会は、権利会議としてもまた、結局、中絶し、そして、より小さな地区 (ツェント、ゴーなど) においてすら、ただばらばらにのみ存続した。その一方で、一般的にラント諸裁判所がその代わりに登場し、そして、それらにおいては時代の経過の中でゲノッセンシャフト的な起源は全く記憶から消えたのであった。⁽²⁷⁾しかしながら法の判告 (Rechtsweisung) および軍隊命令権 (Heerbann) に関する諸原則においては、それでもやはり少なくともその効果の上では、より

多きなまたはより小さなグラーフシャフト地区または裁判所地区の自由な居住者たちは、中世を通じて生き生きと留まつた。⁽²⁸⁾ 諸法書においてもまた、そのようなゲノッセン結合は、まだ明瞭に認識されうる。ただザクセンにおいては、普通自由民 (Gemeinfreien) は、すでに参審員職から、そして、より上級のグラーフ裁判所における裁判義務 (Dingpflichtigkeit) から遠ざけられているので、グラーフのガウ (Grafgau) においては、ただ、いまなお一定範囲の完全私有地の土地占有の代理人として参審員となりうる自由民は、完全ゲノッセンであり、全てのその他の自由民は、より僅かな権利を有する保護ゲノッセンであるか、またはたんなる保護ゲノッセンである。そしてその一方で、(フランク王国のツェントに対応する) ゴーにおいては、まだすべての自由民は完全ゲノッセンであるが、自由民のより上級の諸クラスは、しかしすでに諸義務から除外されているのである。⁽²⁹⁾ それでもしかし共同の裁判制度および組織制度のゲノッセンシャフト的な起源の意識は、次第に失われて行き、ひとは、次第しだいにグラーフシャフト結合の根拠を領土ヘルシャフト (支配) または上から由来する職務封土 (Amtslehn) へと置き換えた。⁽³⁰⁾

ツェントおよびグラーフシャフトにおけると全く類似して、これらの諸関係は、ヘルシャフト的な上級裁判官および下級裁判官の諸地区において、監督官職 (Vogt) および村長職 (Schultheißen) または諸官職 (Aemter) において、展開された。これらは、そもそも公的な諸団体から生じた裁判諸地区に、絶えず類似するものとなった。フォークト (監督官) 裁判集会 (Vogtdinge) と村長職裁判集会 (Schultheißen) は、⁽³¹⁾ すべてでは徹底して、グラーフ裁判集会およびツェント裁判集会に倣つて形成され、そして、ゲノッセンシャフト的な構成と判決発見が、そこでと同様にここでも、妥当した。

3. そのようにして古いツェントゲノッセンシャフトとガウゲノッセンシャフトは次第に単なる裁判所地区

(Gerichtsbezirke) の中へと消え失せたのであるが、「部族ゲノッセンシャフトまたは民族ゲノッセンシャフト」(Stammes = oder Volksgenossenschaft) は、長い間はるかにより高い意味において存続した。フランク王国の分裂後、個々の諸部族または諸民族、そして、それらの諸プロヴィンツ (Provinzen) または諸ラント (Länder) (regna 王国、ducatūs 最高指揮官職、provinciae 州) が、〈それらの自由な一致が《まさにそれらがドイツ帝国を形成した》根拠であるところの〉国家的統一体として現れたのである。³¹⁾ それらの部族ゲノッセンシャフトの理念は、〈なるほど皇帝の役人およびファッサルレン (廷臣たち) であるが、同時にしかし《部族統一体の代表者たちとしてこの時期の始まりにおいてはしばしばまだ民族自身によって選挙されている》³²⁾ 国民的な民族の幹部たちである〉部族のヘルツォークたちの再生産において強力に示されている。あらゆる部族は、その独自の法に従って完全に自律的に生活していたのであり、その諸案件をそのヘルツォークとともに自ら規律していた。いまだ諸法書は、諸ラントの古い独立性と統一性のことを記憶しており、³³⁾ そして、慣習や方言の差異と同じく法の差異は、長い間、部族の諸境界の政治的意味を越えて存続している。³⁴⁾ これらの部族ゲノッセンシャフトは、いまやしかし、帝国そのものと全く同様に、内部的には次第しだいに変化したものとなった。ただ〈帝国会議 (Reichstage) と全く類似して、《ヘルツォークとともに立法と行政に関与するために》³⁵⁾ 荘園会議 (Hoftage) に集まった〉聖職者および世俗人たちのグレントヘルたちだけが、それらにおけるフォルゲノッセンにとどまっていた。³⁵⁾ 次第しだいに、やがてここでもまた、封建的な組織が形成され、そして、荘園会議は、貴族たるファッサルレン (廷臣たち) および自由民たるファッサルレンの諸ゲノッセンシャフトの表現としての、封土会議 (Lehenstage) となった。³⁶⁾

4. ヘルツォーク領 (Herzogtum 大公領) の諸関係が「フルスト領」(Fürstenthümer 諸侯領) へと引き継がれたので、そのようにして始めからすべての自己完結した領土の中で——個々のフォークタイ (監督官職) 地区お

よび裁判所地区のゲノッセン諸団体を別とすれば——ラントのすべての居住者たちのゲノッセンシャフトという理念が存在した。その中にある完全ゲノッセンは、もちろんここでもまた、ラントの世俗的及び聖職者のなグルントヘルたちだけであり、ただそれらの者たちだけが彼らのフルストの荘園会議(Hoftag)に参集したのである。封土制度(Lehnwesen、レーン制)は、さらに封建的理念を持ち込み、そして、荘園会議の代わりにファッサルレン会議(Vassallentage)および騎士会議(Rittertage)が登場した。しかしながら領土居住者たちの独立したゲノッセンシャフトの思想は、失われなかった。そして、その存続は、確かに、後に古い諸団体の崩壊からのアイヌング(結合)制度の形成的な影響のもとにきわめて力強く自己完結するラント高権に対して自らを高めたところの、新たなラント階級的ゲノッセンシャフトの成立に向けて影響がないわけではなかった。⁽³⁷⁾

II. そのようにして全ドイツにおいて封建システムが、古い民族諸ゲノッセンシャフトの残りについて一つの枠を見出し、そして、民族の法意識においていずれにせよまだ「ザクセンシュピールゲルがヘルシャフトの神的な起源についてのその知られた理論と並んで「すべての世俗的な裁判所は選挙(Krönung)から始まっている」という命題を設定することができた限りで」古い觀念によって生きた一方では、個別の地方においては、古いゲノッセンシャフト的な組織がほとんど完全な純粋性において維持された。

そのようにして、スイスにおいては、〈政治的な関係においては初めからツェントであつたかもしれない〉⁽³⁸⁾完全な自由なタールマルクゲマインデ(Thalmarkgemeinde)が、シュヴィツ、ウーリおよびウンターヴァルデンにおいて、なるほど皇帝のフォークタイ(監督官職)のもとに登場し、そして、グルントヘルシャフトの浸透とおして奴隸たちと混合された。しかしながらそれらにおいては、ラントアルメンデについてのそれらによって主張された総手的所有権(Gesamteigentum)がその自由なゲノッセンシャフト的組織を維持することに成功した。⁽³⁹⁾

それをとおしてそれらは、引き続き時代において〈フォークタイと隷属状態を打破し、そして、完全に自由なラントゲマインデとなるべき〉状態に置かれていた。⁽⁴⁰⁾

さらに純粋に、最も古いゲルマン的な諸制度がフリーゼンのもとで確保された。⁽⁴¹⁾ただフリーゼン地方の二三の部分は、隣接するランデスヘル（オランダ、フランドル、ゲルダーの諸グラーフ、ユトレヒト、ミュンスター、ブレーメンの修道院）に服した。その他のフリースラント人たちは、自由な民族ゲマインデにおいて結合された状態に留まった。（半分はフリーゼン、半分はザクセンのデイトマルシェンのような）これらのゲマインデの僅かなものだけが、封土授与されたグラーフたちまたはフォークトたちを裁判官として受け取ったが、その他のゲマインデ、とくにウェーザー河とエムス河の間のゲマインデは、最古の法の意味において完全に自由に自由に留まった。⁽⁴²⁾それゆえフリースラントにおいては、全ての自由民たちの平和団体と法団体としての古い民族ゲノッセンシャフトが存続した。年ごとに彼らの裁判官を選挙した農民団体、諸ツェントに対応したゴーゲマインデ、⁽⁴³⁾そして最後に、古い大きな民族団体のガウから生じたラント（ゼーラントSeeland〔オランダ、デンマークにある地名〕⁽⁴⁵⁾）は、自治的にそれらの組織とそれらの法を形成し続け、自ら裁判した。そして、それは、彼らの平和または彼らの自由を脅かすあらゆる非ゲノッセン（Ungenessen 仲間でない者たち）の防衛のためのまとまりをもった軍隊ゲマインデ（Heergemeinden）⁽⁴⁶⁾であった。個々の諸ラントの上には、しかし、〈毎年ウプスタレスボーム（Upstallesboom）に集合し、そして、すべてのフリースラント人たちに共通の平和を、全てのフリースラント人たちに共通の法を設定し、そして、それゆえ外部に向かってはラントの防衛を、内部に向かっては最上級の立法、⁽⁴⁷⁾および、ラント平和の維持のためおよび個々のゲマインデ間の争いの調停のための裁判官の権力を執行した〉⁽⁴⁸⁾全てのフリースラント人たちの大きな民族ゲマインデが存在した。我々に知られた形式においては、しかし、それにもかかわらず、この全組織は、すでに〈そ

の集会においては、ただ裁判官と聖職者たちだけが諸ラントの全権を授与された代理人として現れるが、しかし集会そのものは連邦の日程 (Tagfahrt) の性格を受け取っていることをとおして独特に形成されていた。フリースラント全体は、独立したラントゲマインデの自由に設立された平和同盟として現われていた。⁽⁴⁹⁾ この組織は、それゆえすでにアイヌング (Einung) の影響のもとに形成されており、そして、そのアイヌングについては後に問題となるであろう。⁽⁵⁰⁾

【以上、第二十五章、終わり】

【以下、第二十五章の注】

注(1) 上述、第十三章、第十四章を参照せよ。

注(2) Eichhorn §234b, Landau, Terr. S. 344 f. Zöpl, R.G. §51. IV, Philips, R.G. S. 211.

注(3) Walter §183 Note 10-13.

注(4) ヴュルツブルクの司教については、すでにAdam v. Bremen VI c. 5. が次のように言う。すなわち、「司教職において彼の名で兄弟たちを有するといわれている彼一人だけが、ヴュルツブルクの司教であった。なぜなら彼自身が彼の教区のすべての廷臣たちを支配するとき、彼は、その上にプロヴィンキアの最高指揮官職を司っているからである。」(solus erat Würzburgensis episcopus, qui in episcopatu suo neminem dicitur habere consortem. Ipse enim cum tenent omnes comitatus suae parochiae, ducatum etiam provinciae gubernat.)」⁵¹ Eichhorn, R.G. §222, bes. Note c.d.e.f. Walter §183, を参照せよ。

注(5) カール大帝をとおして初めてすべてのガウの諸集会が導入されたという見解(例えばWalter §98, 102 f. Schulte §47.)によれば、ガウは「以前は」単なる行政地区にすぎなかったであろう。(不当にも自己の見解をアイヒホルン、

グリムおよびベートマン＝ホルヴェークの中にもまた見出そうとしている) トゥーティッフム(Thudichum, Gau = und Marky. S. 80 f.) は、カール大帝の諸命令をただ〈グラーフのもとで個々のツェントにおいて設置される上級の裁判所〉にのみ関係づけ、そして、いかなる時代にも大規模なガウ集会は存在しなかったと主張している。ガウは、そうすると、ただ、そこでグラーフが租税の取立てと戦闘能力のある兵士集団(Mannschaften)の徴集を任されていた行政地区にすぎなかったことになる。Unger, Landstände I. 49 f. をも参照せよ。

注(6) Eichhorn § 234 a. Zöpl. R.G. § 10 XI. Walter § 172. 180. 184. Roth, Beneficialwesen S. 432 f. Schulze, Erstgeburts. S. 79 f.

注(7) Cap. v. 877 Pertz I. 537. Roth S. 419 f. Walter § 184 Note 6-9. Schulze, Erstgeburts S. 62-71. 82-95. 後者〔シュルツェ〕は、十一世紀の終わりと十二世紀の初めを、帝国職務の世襲制(Erblichkeit)がより決定的な「法」原則として確立した時点とみなしている。

注(8) Eichhorn § 222 Note k. Schulze § 68. Note 2. Walter § 183. Note 30 f. 185 Note 4. Schulze, Erstgeburts S. 154. Annl. Fuld. a. 881. Pertz I. 394 : 「大修道院長たちと一身を捧げるべき廷臣たち」(abbatias et comitatus dedid.)。Annal. Bertin. 858. 877 ib. I. 452. 504.

注(9) Walter § 183 Note 27. 32; § 185 Note 56は諸例を与えている。

注(10) Eichhorn § 234 a. Zöpl § 37. III. Landau, Terr. S. 346 f. Thudichum l.c. S. 85. Walter § 183-185. Schulze § 68.

注(11) 分割可能性についてはEichhorn § 301 諸グラーフ・シャフトの蓄積については§ 222 Note 9。とくに、しかし Schulze, Erstgeburts S. 149-177および分割されたまたは共同体的に居住されるグラーフ・シャフトの諸例, 156-167. Vgl. Walter § 185 Note 3. 9. 10.—Thietmar. Chron. IV. 22. Pertz III. 777 (「十五人の廷臣たちの中の廷臣に」15 comitatum comite)。Reginon cont. a. 949. Pertz I. 620 : 「王の許可による特権または管理者職のどのようなものを授けられ有したところの廷臣が行ったように、彼は、〔それを〕あたかも相続財産のように息子たちの間で分割した。」(Uto

comes obit, qui permissu regis quicquid beneficii aut praefecturae habuit, quasi hereditatem inter filios divisit.)°

注(12) Schulze, Erstgeburt S. 154. Walter § 185.

注(13) Landau S. 350. 351. Unger, Landst. I. 124 f. に於ける註明°

注(14) Eichhorn, R.G. § 302 Note g. Homeyer, Sachsenspiegel II. 2. S. 535 f. Landau, Terr. S. 352 f. Gaue II. S. 43 f. 240 f. Stobbe, Zeitschr. f. deut. Recht. Bd. 15 S. 121.

注(15) Eichhorn, R.G. § 141. 170. 221. 234 a. II. Landau, Terr. S. 360 f. Zöpl § 33. III. § 52. Phillips S. 208 f. Schulte, R.G. § 68. Walter § 172. 180. Lerchenfeld, d. althair. landst. Freibriefe S. XXXII f. Schulze, Erstgeburt S. 75 f.

注(16) Unger, Landst. I. 130-189. Walter § 199 f. Schulze, R.G. § 68. Schulze, Erstgeburt S. 75-79.

注(17) So im Schwabensp. c. 139. Kaiserr. c. 139 : 「フュルステン職」(“fürstenamt”) — 「皇帝の奉仕職」(“dienstant des kaisers”)°

注(18) Pertz L. II. 291.

注(19) そのうちを諸法書は法の原則と語っている°。すべてSchulze, Erstgeburt S. 95-149. を参照せよ°。そのうち諸判決、同時代者たちの諸見解および歴史的な諸例に基づいて、原則的な不可分性が証明されている°。

注(20) Schulze l.c. S. 228-309.

注(21) Eichhorn, R.G. § 222. 234 a. Landau S. 344 f. Sachse, Grundl. 415. Zöpl § 51. Phillips S. 210. 211. Walter, R.G. § 183 f. Schulze, Erstgeburt S. 71 f. 117 の特別の各々の解散やトントムLandau, Beschreibung der deutschen Gaue, bes. I. S. 226 f. II. 233 f. は、説明としてのみある°。しかし、ハイニンゲン・トンプ・Wippermann, Zeitschr. f. deut. Recht. Bd. 16. S. 1 f. を参照せよ°。これらの諸過程は、トナー・ディッポン・Thudichum, l.c. S. 84 f. に於いては、全く異なる解釈を知ることが出来る°。

注(22) フュルストたちの地位は、いまや帝国封土 (Reichslehn) (Scepter = und Fahnenlehn 軍旗領、皇帝直轄領) の保有者

とみなられ、あらゆるその他の裁判官の権力は陪臣領地 (Afterlehn 陪臣封土) とみなされた。ザクセンシュビーゲル Sachsenp. III, 53. § 2: 「王は、裁判官の口に、固有財産、封土財産、および、脆弱な臣下の生命について告発させるゆえに、皇帝は、彼を、しかし全ての場所において従者とはせず、そして、全ての不正な人々をすべてのひとびとの行為について正させることをしない。それゆえ皇帝はフルストたちに軍旗領を代理させ、そして、フルストたちはグラーフたちにグラーフシャフト (伯爵領) を代理させ、そして、グラーフたちは債務者をシュレードーム (Schuldturm 債務監獄) におく。第二バラグラフ。兵士団の手も声も封土に来ないときは、裁判所は彼らを首と手にくくつ [罰せよ]。仮訳。」 (Den koning kuset mon to richtere over egen und over len unde over jowelkes mannes lif. De keyser en mach aver in allen steden nicht gesin unde alle ungerichte nicht gerichten to aller tid. Darumme liet he den vorsten vanlen, unde de vorsten den greven de gravesscap, unde de greven den sculteren dat scutledom. § 2. In de verden hant en scal nen len komen, dat gerichte si over hals und over hant.)。

注(23) ウェッテラウ (Wetterau) の自由な裁判所は *ウーヴェル*。Landau, Terr. S. 352 f. Gaue S. 231 f. Wippermann l.c. Thudichum, Gau = und Markv. S. 35 f. 53 f. *ウーヴェル*、あらゆる村がその下級代官 (Untergreben) を任命し、全いの村が一緒になつて最上級のグラーフを任命したところの、カーチェン自由裁判所 (das freie Gericht Katchen) にくくつ Landau, Gaue. I. 92 f. Wippermann l.c. S. 70. ウェッテラウのシェントウマインスターナーをグリム Grimm III. S. 394 f. bes. S. 411. 415. 420. 435. *ウーヴェル*。

注(24) Zöpl § 42. II: 54. I. Eichhorn § 309. Walter, R.G. § 287. Schulte R.G. § 77. I. Unger l.c. I. 178-189. Tittmann, Gesch. Heinrichs des Erlauchten I. 115 f. 諸カゾーネターリ (Cap. Lang. 802 c. 14. 803 min. c. 20. 807 c. 12. 809 c. 5. 817 c. 15. 817 c. 14. 823 c. 13. 829 c. 5. Pertz I. 104. 115. 151. 156. 216. 217. 233. 354) に従つて毎年三回めたれ *レギラチタ generalia* (全体的な意見) *malla comitis* (仲間 [従者] の選好) は *placita provincialia* 属領民の意見 *legitima* 法で定められた慣習 *communia* 共同会議 *vulgaria* 日常会議 または *plebiscita* 民衆会議 *landdinge* ハント裁判集会

lantage ラント会議、または、landgerichte ラント裁判所、として存続したのであるが、Const. v. 1234 においては、全てのフルストおよび主人たちに対して義務とされ、そして、諸法書 (Rechtsbücher) においては、この一般的な制度として現れている。参照せよ。ザクセンシュピエル III, 61 § 1. シューベンシュピエル c. 135 「十八週間の間、王から裁判所を受け取ったあらゆるフルストおよびあらゆる主人は、彼のラント裁判集会をもつべきである。」(uber achtzehn wochen sol ein jeglich furste und ein jeglich herre, der gerichte von dem künige empfangen hat, sin lanttegeding haben)。^{同 c. 358} 「彼の裁判所において座る全ての人々は、そのラント裁判集会を訪問すべきであり、財産を彼の裁判所において有するかまたは足をもつて彼の裁判所において座るべきである。」(alle die in sinem gerichte sitzent, die suln sin lanttegeding suchen, die gut in sinem gerichte hant oder mit huse in sinem gerichte sitzent)。

注(25) ヘッセンガウの地方従者および地方農民たち (milites et rustici provinciales) の集会は、すべてであった。Wenck, Hess. Landesgeschichte II, 416 f. Landau, Gaue II, 4, 5, 242 f. 異説、トゥーディンフ Thudichum S. 104 f. 他、ただ役人たち、代表者たち、聖職者たちおよびグルントヘルたちだけが訪問した、イギリスの scirgemot (州の民会) (Edg. III, 5. Cnut II, 18-19. leg. Henr. I. c. 7, § 2) の援用のもとに、全ての時代についてのより大きなガウの諸集会の中に、ただ名士たちの集会のみを見ている。類似してマイセンのラント裁判集会 (Landdinge)。^{Unger I, 184, 185.}

注(26) とくに Titmann und Unger l.c. における証明を見よ。Thüringe zu Mittelhausen についての大ラント事項については、Walter l.c. Note 4. における Legenda Bonifacii II, 8 を見よ。諸法律または帝国会議または荘園会議の諸決議の公判もまた、ここでは行われ、時には、それについての形式的な同意すら求められた。

注(27) ひとが早期に必ずしも特殊に関係者ではない人々 (参審員たちおよび当事者たち) を次第にただ負担として感じられたにすぎない臨時裁判集会の訪問から解放したこと (Karol. M. leg. Lang. c. 49. Cap. 803 c. 20. Pertz I. 115. 805 c. 5 ib. 156) をとおして、出頭すべき権利があらゆる人に留まった (Grimm, R.A.S. 749 f.) にもかかわらず、公的な裁

判所のゲノッセンシャフト的な性質についての観念が、まず最初に失墜させられたのである。

注(28) 完全な証明を提出するためには、裁判所組織および軍隊組織へのより詳しい立ち入りが必要であろう。それにもかかわらず、それらの中に古い民族法的なゲノッセンシャフトの未裔を認識するためには、至る所で繰り返される基礎形式で十分である。

注(29) かくにシエトツ・Stobbe's über die Gerichtsverfassung und über die Stände des Sachsenspiegels in der Zeitschr. f. deut. R. Bd. 15. S. 82 f. und S. 311 f.; また、ホーメイヤーHöfner, Sachsensp. I. c. S. 533 f. トゥーディンフム(Thudichum, Gau = und Markv. S. 45 f. をみよ。 —ザクセンシユビュエルSachsensp. I. 71における「ゴークラーフ(gogreve)の選挙」:「選挙されたゴークラーフ、または、封土を与えられた裁判官」(de gekorene gogreve oder de belende richte.)。ゴークノッセンの自治、ib. III. 64 § 10:「ゴークラーフエにはスプフェニツヒまたは「シリングを、ラント民の選択に依じて」(deme gogreven ses penninge oder enen scilling, al we der lantlude kore stat.)」。

注(30) 特筆すべきことは、まさにカロリング朝の諸制度を最も純粋に継続しているウェストファールの刑事裁判所(Vengerecht)において、グラーフ領の住民たちのゲノッセンシャフト的結合はもはやどこでも認識し得ないことである。自由グラーフシャフト領と自由参審員職は、同じように職務封土(Amtslehen)となっており、自由参審員は、なるほど相互の間ではゲノッセンシャフトを構成するが、しかしそのゲノッセンシャフトは例えば民族ゲマインデの機関ではない。古い民族ゲマインデは、それゆえいつては、ある程度、官職正義(Stuhlgerichte)の保有者のクライスに限定されてきている。Vgl. Walter § 385-391, Schulte § 116, 117, 123.

注(31) Phillips, R.G. § 80, Walter § 174. それゆえ〈先ず第一にそして主としてフランク族の部族王であり、そのような者として彼がその他の部族の出身であった場合にもまたフランク法を受け取った(そのようにまたSchwabensp. c. 132 § 6, Sachsensp. III. 54 § 4)と〉のドイツ王の選挙は、初めは個々の諸部族の約定に基づいていた。通常、フランク族とザクセン族は(コンラード一世の選挙において初めてバイエルンおよびシユワーベンもまた)結合しており、

そして、王は、他の諸部族の同意を獲得するか、あるいは、強要せざるを得なかった。Vgl. Phillips, *die deutsche Königswahl bis zur goldenen Bulle*. Wien 1858.

注(32) バイエルン法典 (lex Baju. II c. 1) は言へ。「王が任命したか……または民衆が自らのために選挙したか」の「指導者」(ducem quem rex ordinavit --- aut populus sibi elegerit) と。また十世紀においては、バイエルン人たちが一人のヘルツォークを選び、彼を皇帝が認証した。v. Lerchenfeld, *die althair. landst. Freibriefe*, Einleitung v. Rockinger S. XXII. Zöpl § 42 Note 3. Schutze, *Erstgeburt* S. 122. テーリリゲン (Thüringen) シェーレン (Schwaben) およびヘルンテン (Kärnten) (この二つは後に司教職叙任形式におつた) からの痕跡は、Schutze S. 123. 124. におこつ。

注(33) ザクセンシュベールゲルSachsensp. III. 53 § 1: 「あらゆるドイツのラントは、そのプファルツ伯を有する。ザクセン・バイエルン、フランクンおよびシローベン。これらはすべて王国であつた。」(jeweilk dudesch lant hevet sinen palenzgreven. Sassen, Bayern, Vranken unde Suaven. Dit waren alle koningrike.) Schwabensp. c. 120.

注(34) 上述、第十章を参照せよ。

注(35) Eichhorn § 309. Phillips § 80. Zöpl § 42. 54. Unger, *Landstände* I. S. 115 f.—バイエルンにつては、とくに v. Lerchenfeld l.c. S. XXVII f. Schwabensp. c. 138 (それによれば、司教たち、グラーフたち、主人たち、ファッサルレン (廷臣たち) および従者たち (Dienstleute) がヘルツォークの莊園を訪問すべきである。)

注(36) 上述、第二十三章を参照せよ。

注(37) 以下、第五十一章を参照せよ。

注(38) そのようにブルンチュリー (Bluntschli I. 21.) は推定しつゝ。Blumer l.c. I. S. 15. Maurer, *Einl.* S. 316. 320. をまた参照せよ。

注(39) Vgl. Maurer, *Einl.* 302 f. Blumer l.c. Bd. I, bes. S. 78 f. 117 f.

注(40) 以下、第四十九章を参照せよ。

注(41) Eichhorn, R.G. § 285b. 285c. v. Richthofen, friesische Rechtsquellen. Unger, Landstrände I. S. 176-167. v. Daniels II, 3. S. 404. Walter, R.G. § 303.

注(42) フリースラント人は彼らの自由を特別の特権として、帝国の一般的な諸状態における一つの例外として受け取っている。彼らの自由をより確固として基礎づけるために、彼らは、それを彼らの諸法律の中で教皇と皇帝の諸特権に廻らせ、そして、それを特別の諸行為の報酬として説明しようとしている。例えば、Richthofen I.c. S. 10: 28 ib. S. 102: 109: 368 § 2 ec. における7. Kire (第七選定権) を見よ。彼らは、彼らの自由がその時代の普通の自由から異なる」と、彼らの自由は、減少されないゆえに、ただliberi domini (自由な主人たち) (allodialen Grundherren完全私有「世襲領」のグルントヘルたち) の自由にのみ比較されなければならないこと、をもまた、十分に意識している。それゆえ、例えば、リビトホーフェンRichthofen I. S. 440. 441. においては、三度繰り返されるマグヌス (Magnus) の選定においては、風が雲から吹きそして世界が存在する限りで、生来的および非生来的なフリースラント人たちが「フライヘル」であろう。すなわち、「風が雲からはるかに吹き、そして、世界が存続する限りで、生まれながらのそして非生まれながらの全てのフリースラント人がフライヘルを守る〔選挙する〕こと。仮訳」(dat alle Fresen fryhern weeren, di berna ende di oenberna, alsoe langh soe di wynd fan da wolkenen wayd ende dye wrauld stoeede.)。

注(43) S. 1361 b. Richthofen S. 109. Nr. 3: 「いひつゝの領地の諸地域がその審判者たちをそれらの慣習に従って選挙せらるゝ」(quod singuli districtus terrarum suos iudices elegant secundum consuetudinem suam)。Westervolder Landr. v. 1470 ib. S. 271 § 25: 一個々の農民団体においては、裁判官職は、割り当つに従つて一定の順序において年々への変り目に交替した。Brokmerにおいてしかり。Brokmerbrief b. Richthofen S. 151 f. § 1.19-21.

注(44) そのようなゲーメイネは、Brokmer、Emsiger、Rüstringer、Fivelgoerなど、(独自の意思 (Wilkür) を有する) そもそもほとんどすべてのゲーメイネである。Vgl. Richthofen S. 115 f. それゆえいつでも集会における幾人かの

審判者 (judices または *rediewan*) が言及されている。例えば *Richthofen* S. 135, 138, 182. 諸ゴーゲマインデは、一部は、直接農民団体 (*Bauerschaften*) へ、一部は、(ブロクマーとリュスティンガーのように) 地区および農民団体、ときおりさらに隅 (*herna*) における農民団体へと分裂した。

注(45) 諸ゼーラントは、フリースラントがそれらから成り立つところの本来の政治的な諸統一体として現われている。例えば *Richthofen* S. 109, Nr. 6. を見よ。それゆえ彼らは、——アイヒホルンが認めるように、より小さな諸地方またはゴーゲマインデではなく——古い民族団体またはガウゲマインデとみなされなければならない。

注(46) リヒトホーフエンにおける一三三三年のウプスタルスボームの諸法律 *Upstallspomer Gesetze v. 1323 b. Richthofen* S. 102, I: 「我々の平和を保持するために、一致してラントに対して何らかの恥ずべきことをしようとするあらゆる主人たちに対する共同の防衛」 (*gemeinsame Wehr gegen jeden Herren, der einich zeland schaya ifte schanda will, um usen fridom to binaden*)。それに対する追加 *S. 109, Nr. 3.*

注(47) それゆえ全てのフリースラント人 (*Fresena*) に法 (*riichte*) (*S. 22*) を設定するフリースラント人たちのヴィルキュールまたはケスト (*willekoer* [意思] oder *kest* [帯] *der Vresen*) (*Richthofen* S. 2 f.)。二十四のラント法 (*ib. S. 40 f.*) は、つねに「これは……すべてのフリースラント人にとつてのラント法である。」 (*this is that --- londricht allera Frisona*) と始めている。

注(48) *Upstallspomer Ges. lc. S. 104, VII. Eichhorn §285b.*

注(49) それゆえウプスタルスボームの諸法律 (*Upstallespomer Gesetze*) は、一つの誓約された契約である。 *S. 107, XXIII. 一三六一年の諸追加 (ib. S. 109.)* をこれらの法律は、明示的に「同盟と平和の諸条項」 (*articuli confederacionis et pacis*) と称している。

注(50) 以下、第四十九章、第五十章を参照せよ。

【以上、第二十五章の注、終わり】

【以下、「C. 自由なアイヌング 第二十六章 自由なアイヌングの始まり」に続く】